

2020年1月25日  
第3回東京開催

「ストップ虐待・親支援の  
あり方検討会議」

LIVE 記録

日本女子大学特別重点化資金  
虐待支援研究班

日本子ども子育て支援センター  
連絡協議会

日本多機関連携臨床学会

2020年1月25日 第3回東京開催  
「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」

**プログラム**

- ◇講演1 山縣文治（関西大学人間健康学部教授）  
「子ども虐待の状況と支援のあり方」
- ◇パネルトーク  
司会：西 パネリスト：山縣、後藤、吉澤
- ◇講演2 後藤英一（東京都世田谷区保育担当部保育課長）  
「世田谷区の保育行政の取り組み」

**企画**

吉澤一弥、村上千幸、西智子、松原乃理子

**運営委員**

三代果乃子、足立実咲、小峰みのり、上田綾香、飯村愛

## 開会の挨拶

木本宗雄（ここネット会長、山下保育園園長）

皆さんおはようございます。ご紹介頂きました日本子ども子育て支援センター連絡協議会の木本でございます。通称ここネットといって、私たちの団体と日本女子大の先生方の協力で虐待の検証を進めております。痛ましい虐待事件が後を絶ちません。何でかなと私は思っていますが、昨年の11月に山梨で全国大会を開催したときに、吉澤先生のお話を伺いましたら、人間は本来自分だけで育てるのではなくて地域とか祖父母とか、周りの人の中で育つということを聞きました。それが核家族化や地域の連帯の希薄化によって、家庭の、特にお母さんに1番負担がかかり、そこから虐待に結び付いているのだと思います。国の方でも一生懸命取り

組んでおられますが、事故対策ではなくて、起らない社会を作ることが大事だと思っています。チンパンジーは6歳ごろまで自分の子どもを誰にも任せないで育てるそうですが、人間はみんなの力で、手で育てる。その生き方がずれてきているのだと思います。このような勉強会を通じて子どもを安心して産み、育てる社会づくりに邁進していきたいと思いますので、どうぞ今日の研修を、それぞれの地域に帰られましたら生かしていただいて、山縣先生のお話を今日は聞けるということで、私も宮崎からバタバタと駆けつけてまいりました。どうぞ1日よろしくお願い申し上げます。簡単ではございますが本日のご挨拶といたします。



## 企画主旨説明

吉澤一弥（日本女子大学教授、虐待支援研究班代表）

<p26～当日資料>

### 各地での検討会議開催

皆さんおはようございます。私は日本女子大学児童学科の吉澤と申します。今日は「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」の第3回東京開催の企画趣旨について、お配りしたプリン

トに沿ってお話しします。「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」のこれまでの開催を簡単に振り返ります。昨年の6月23日に日本女子大学で第1回目の会議を行いました。続いて8月30日に埼玉県熊谷市のなでしこ保育園、

9月6日には熊本市の子ども文化会館、9月29日には東京で行いました。11月の甲府のこネットの全国大会の早朝セミナーで私がそれまでの成果をお話しさせていただきました。それをまとめたものが、今日お配りしている「親を加害者にしない支援のヒント集」という冊子です。みなさん1冊ずつお持ちいただいておりますので、後ほど時間のある時にお目通ししていただければと思います。

### 虐待死事件と体罰禁止の法改正

今木本会長もおっしゃいましたが、そもそも一昨年東京目黒区の5歳児の事件や、昨年の野田の小5女児の虐待死事件がありまして、世の中に大きな衝撃を与えました。そして体罰禁止と懲戒権の見直しという法律の改正がついに動き出しました。いよいよ今年の4月に法律が発効しますが、私の予想では、それに合わせて4月前後に連日マスコミ報道や識者によるシンポジウムなどで議論が行われると思っています。

村上先生は、育児現場と子育て支援現場で、体罰禁止の法律をどう受け止めていいのかということで、不安や混乱が生じるのではないかと強く懸念しています。それが現実になりそうな予感がいたします。体罰禁止の法律を世界で最初に作ったのはスウェーデンです。1979年に体罰禁止の法律を作ったわけです。これはセーブザチルドレンが公表している調査ですが、1960年代に体罰に肯定的な態度の人が60%近くいました。体罰を用いる人が90%でした。それが1970年代、1980年代の10年刻みで見ると減ってきています。この時系列の中で、スライドのグラフの横軸の中央あたりが1979年ですが、体罰禁止の法律ができたのがそのあたりです。

### スウェーデンと日本の違い

このグラフをどのように理解したらよいかわかりますが、スウェーデンは体罰禁止の法律が出来るまでに、グラフの前半部分ですが既に体罰に関する議論や社会活動が市民の間で行われて

きました。それを通して市民は体罰が子どもの教育や自立に全く意味を持たないことを学びました。そういう積み重ねの歴史がありますので、スウェーデンの体罰禁止の法律が出来たのはスタートではなくて実は着地点なのです。法律を作ったときに政府が大々的なキャンペーンをし、牛乳パックに体罰禁止のプリントをしたりと、この話は有名ですが、これらの活動はダメ押し的な意味を持っています。それに比べると日本の4月の法律の発効は、スウェーデンとは異なりまさにスタートに過ぎないと思われます。Joan E Durrantの文献を読んでそう認識しました。

### 何をなすべきか

現状の分析の上で我々がなすべきことを、まさに検討会議でやっているわけです。まず専門家の講演を聞き、正しい知識や最新の情報を得ることをしています。その上で、上から与えられるのを待つのではなく、我々実践者が集まって課題を明確にすること（問いかけと分析）、自主的に話し合いをしながら考えること（エージェンシーの獲得）、解決のためのアイデアを出し合い実行する（モデル化と検証）。そのような活動を通して、スタート地点における体罰なき子育て文化への変革を可能にするコミュニティ形成を目指して活動を行ってきています。

我々の虐待支援研究班の公式ホームページを公開していますので、時間のある時に見ていただければ幸いです。今までの活動の全てをPDFの形にして発信しています。以上、本日の趣旨ですが、本日のシンポジウムは先生方の講演2つと、パネルトークもありますので、ぜひ最後までお付き合いください。よろしくお願いいたします。

**参考文献：**Joan E Durrant, Legal reform and attitudes toward physical punishment in Sweden, The International Journal of Children's Rights 11(2):147-173 · June 2003

## 講演1 「子ども虐待の状況と支援のあり方」

山縣文治（関西大学教授）

<p28～当日資料>

皆さんおはようございます。今日は主な内容にはいれてなかったのですが、体罰の話で、新聞やテレビに何度かコメントさせていただいているのですが、なかなか、自分の一番使って欲しいところをほとんど使ってもらえないんですよ。何を使われるかって、何が体罰で、何が体罰でないんですかってことですね。この法律はそういう趣旨じゃないんですよ。体罰を使わずとも子どもを育てる、関わる方法があるんですよ、それを伝えたいのが国のメッセージであると、私は思っています。ですがそこはほとんど。保育士は、体罰禁止法は何か関係していますか。（フロア：はい。関係すると思います。現在保育の中で体罰することは有り得ませんが、保護者がお子さんとの関りの中でどういう対応をするかというときには、この法律が出来たことは関係してくるかと思います。）なるほど。そうだと思います。今前半で言われた部分が、誤解されているんです。正しく理解しておられましたけども。体罰禁止規定による体罰をするものは、保護者のみなんです。

学校の先生は体罰禁止ですね。乳児院や児童養護施設の方は、被措置児童の虐待ってことで、体罰はだめなんですよ。ところが保育士にはそういう法律がないんです。大丈夫？って思いながら。直接法律に関わらないけど、現場で自分自身を振り返るときのものに、全国保育士会の方で作っていますが、保育者は法律の対象ではありませんが、実践上では非常に役に立ちますよというものを作っています。

### 1. 虐待事案に共通していること

本題に入ります。私が子育て支援に興味を持ったのが1980年代の後半なんです。児童相談所で、虐待の死亡事件が起こって、所長の反対があって途中から応援して下さることになったのですが。なぜ児相が関わっていながら

死亡事件が起きたのかを、自ら検証しようと、過去30年に渡って、児相が関わっていた死亡事件を全て洗い出しました。そこで気が付いたのが子育て支援が必要だということです。

さあ、共通点は何、3人の名前が出てきています。（フロア：親が再婚している。）子どもがいて再婚している家庭のことを、ステップファミリーと言います。子連れ再婚ファミリーです。栗原心愛ちゃん、ここは、ステップファミリーではないですが、それよりももっときついです。DV再婚家庭です。あっ、DVが分かっている、離婚したのに復縁していると。どうなるかというと、「お前は俺が暴力的なのを知っていて再婚したんだ、あんただってわかってるんだ」ってことになるんですね。

裁判きつかったですね。何がきついと思ったかって言うと、「いくらDVで心が拘束されていても親として子どもを守るべきだ」と、裁判所は言うんですね。どうですか、できますか。結構しんどいですよ。これは子どもを除いて言うと、いくらDVを受けてもあなたは自分を守るために逃げるべきだったって言うことですよ。DV被害者にしたらたまらないと思います。こんな重くていいのかって。DVについて認めていなければまだいいです。認めたうえでその結果ですから。

（フロア：女の子）。後は？（フロア：愛という字）そうね、全部愛という字が入っていますね。ここも僕の中で結構ポイントなんですよ。全部虐待で亡くなったお子さんですよ。結果としては確かに大変な事をやったと新聞で言われましたが、おそらく子どもが生まれたときにはそんな気持ちは全くなかったんです。おそらく、いい子に育てたい、いい子になって欲しい、素敵な女の子になってほしいと思って愛という言葉を付けた。

他にも、転居していますよとか、児童相談所

や警察から逃げ回るような。栗原心愛ちゃんだったら、親が住所を変えずに小学校だけ変えていますとか。そこに違和感を持つかどうかなんです。学校の先生が今回持たなかった。教育委員会も。アンケートを見せた、怒鳴り込んできた、その直後に親は同じ住所なのに隣の小学校校区なんです。ところがその情報が学校から次の学校に正しく伝わっていない。

親が住所変わったから小学校代わるのは普通の話ですよ。今は住所変わらなくても、色々な事情があって越境型も Ok ですよってことになっています。制度上は問題はないですが、ちょっと違和感を持ってほしい。いじめがあったのかなとか、親が良からぬ状況に陥っているのかなとか。そういうところを見る目がなかったのかなと思っています。

今日は虐待の背景やどうかかわればいいのかってことで、私に答えを求めないでください。私が答えを分かっていたら、虐待はなくなっていますから。分からないんです、みんな。一生懸命模索しているんです。ちょっとでも減らそうと。

ストップ虐待・親支援のあり方検討会議  
＜日本女子大学 虐待支援研究班＞

Home ホーム	Organization 組織	Basic Number バックナンバー	Material 資料提供	Contact お問い合わせ
<p>●プログラム</p> <p>1. 講演 山崎文彦（国文学研究資料館） 「子ども虐待の現状と今後の取り組み」</p> <p>2. 講演 橋本裕一（東京警察視察官） 「児童虐待の現状と今後の取り組み」</p> <p>3. パネルトークまたはグループ演習</p> <p>※講演の費用は別項です</p> <p>～第2回、東京開催～ 「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」 日時 2020年1月24日（土）10時～13時（9時30分開場） 会場 日本女子大学目黒キャンパス・第2回講義棟大ホール 参加費 500円（当日受付にてお支払い） （税込・学生・無料） 定員 300名</p> <p>次回開催のお知らせ 詳細はこちら</p> <p>お申込みはこちら</p> <p>代表挨拶</p> <p>虐待支援研究班事務局</p>				

## 2. 虐待を受けた子どもたちの気持ち

レジュメに2ページにわたって長い文章を書いています。これは月刊福祉という雑誌で、5年間くらい虐待を受けた子どもたちのイン

タビューをしてまとめているものの、ポイントの部分を抜き出したものです。一つのところに2つくらいの事例を入れています。学部は違いますが、日本女子大の林浩康先生もメンバーで、一緒にやらせていただいています。

ひどい虐待を受けた子どもは、世間のイメージはどうなっているかという、子どもは親を嫌っていると。私もこの仕事をする前はそう思っていました。インタビューをしたら全然違いました。インタビューに応じてくれた人ですから、一般化できるわけではありませんが、50人くらいにインタビューしたうち、親を徹底的に拒否している子は、1割いるかないかです。ほとんどは気にしながら生きています。一緒に住もうとする人もいますが、ほとんどは気にしながら生きてるってということなんです。

最初は世間のイメージ、親との距離をとろうと思っている子たちのことが書いてありますけども。1人の子は、親が10代だから管理するって言って、バイト代から全部管理していたそうです。大学に行きながらバイトしていたんですね。ところが、大学から通知が来て、授業料を払っていないから学校にもう来られないと。親に聞いたら、あれは俺の金だと。お前を育てたんだ。彼はそこで怒り倒して、初めて父親を殴ったって言うていましたね。そんな形で嫌っています。

2つ目の後半の子、この子もですね、ものすごい生き方をしています。彼女は、私がしゃべった言葉で印象的だったことは、最初はインタビューは嫌だと言っていたんですが、なんとかやりとりをしたら、「私は友人を作らないことにしているんです」。「なんで?」。この子は施設を4回くらい変わっています。何で変わったかという、施設や学校に親がやってきて、暴れまわると。学校に行ったりして。それで来なくなって変わって。せっかく友達が出来たのに何回も変わって、さよならも言わずに逃げないといけな。それを繰り返して、結局は友達を作らないという生き方を選んでいくんです。警察沙汰で大騒ぎになったこともあるそうです。その子が、どういったかって言うと。「私

は60代やねん」って言ったら、「おっちゃん年やね」って話をしたあとに、「普通の家庭は親が弱ってきたら介護したりしますよね。介護かあ。介護をしてあげる自信がないなあ。これって薄情かな」。あんた人生むちゃくちゃにされたんやでって。その子がですね、介護のことで悩んで、親を気にしているんです。蹴とばして逃げてもいいはずなんです。でもそうはならない親子の機微。

3番目のパターンは意外とよくあります。虐待の責任は自分にある。私がいるから妹が被害に合う。私がいなくなったらいい。今日の話に繋がっているんですが、島田妙子さん、私が10年以上付き合ってきた、虐待を受けた女性。もう40代の方です。「虐待の淵を生き抜いて」っていう本も書かれています。彼女は3回くらい死にそうになっています。3回目は本当に死ぬと思ったと、お風呂に頭をつけられて意識が朦朧とした中で、頭の中に浮かんだのは、「これでお父ちゃんは虐待をしなくて済む。私がいるからお父ちゃんは虐待をする、いなくなったら虐待をしなくていいんだ」と思ったと。その後彼女は10年程前に出会ったときに、「山縣さんたちは子どものことばかり言っていると、私は子どもを救済するのは当たり前だけど、親も救済しないといけない、親を支援してあげないといけないんだ」と。彼女は親支援を強調し、虐待0にしようとゼロ会議を民間の活動としてやっています。

### 3. 予防的支援

子どもは、親を決して嫌っているわけではない。親との距離感をどうとろうかと。一緒に住もうという方向ではないけど、どうにか親であり続けることを意識するそういう支援が出来たらいいかなと。親と子どもの関係を切り離さない、予防的な支援。一旦切り離したとしてももう1回距離を縮める。少なくとも心の距離を縮める。一緒にすることを必ずしも目標にしているわけではありません。住めたらいいなとは思いますが、住まなくても親子ですよという関係をどうしたら意識出来るかということを考え

て仕事をさせてもらっています。

親子関係の基盤は、その関係が安心、安全、安定したものであるということ。親がそのために努力する必要があるということと思っています。虐待を受けて育ってきた子どもたちはこの3つの安、安らぎが薄かったり消えてしまったりした状況にある。考えてみた「安」が3つなので、「あんざん」と名付けました。

子育て支援は長期的視点での「あんざん」の基地作り。虐待死はその基地が親にも子にもなかったということです。この基地が回復できるよう支援しつつも、これが困難な場合、新たな「あんざん」の提供。養子縁組とかですね。3つの安というのは愛着ということですが、アタッチメントという言葉のキーワードだと思っています。

多くの子どもたちは親が愛着の対象になっていくわけですが、社会的養護サービスの元にある子どもたちは一部が壊れてしまった。それをどう回復するか、他の人が変わって愛着の対象になっていく、それを目指して虐待の仕事は必要だと思っています。

虐待の4つの予防ということですね。普通テキストは3つって書いてありますが、4つにしました。3つの場合は発生予防と早期発見・早期対応、見守りとか再発の予防、一次二次三次なんて書き方がされています。保健関係のテキストはよくそう書いていますが、早期発見・早期対応だけでなく、やりたいことは、重度化・深刻化の予防です。なかなか早期発見・早期対応はできないんです。やることは何かというと、ここから重度化・深刻化しないことに取り組んでいくことに意味があるのかなと思っています。これはオリジナルですから、あまり信じないでください。一般的には3つの予防で考えられたらいいと思いますが、私の場合は虐待についてはこれらを意識することが必要なのかなと思っています。

### 4. 虐待が起こりやすい状況

虐待の死亡事例の検証をしていると似通ったことに気が付くことがあります。誤解をしな

いでください。子どもに責任があることを言っているわけではありません。どういう状況の子どもか、虐待を受けやすい子どもということで使っています。どれかあれば虐待を受けるというわけでもありません。組み合わせさせて、組み合わせさせて出てくると言うことです。

親の期待に沿わない行動。3歳ぐらいの子どもに分からそうとする親って結構いますよね。思うようにいきません。「昨日言ったのに」って、子どもは昨日のことはなかなか覚えていないですよ。それでだんだんイライラしてくる。自己主張が強い。上の2つは子育て支援でよく使われる言葉でも出てきますが、「私を虐めようとしている」、「わざと私を怒らせようとしている」という言葉を使われるお母さんお父さんもいます。成長が遅い。障害。この2つの共通項は、比較をしたがるということです。他の子どもと比較して、なんでうちの子は？と。うちの子もいいところがあるんだけど、悪いところと相手のいいところを比較して、常に自分の子が悪いと思ってしまう。実子でない。こういうことが、虐待を受ける子どもたちに比較的よく出てきます。

親、精神人格面の問題ですね、人格障害あるいはアルコール依存症、薬物依存の方々が結構いらっしゃいますよね。それから自信過剰。歪んだ責任感、「体罰をしなければ子どもは育たない。自分はそうやって育ってきたんだ」って。DV、家庭内孤立、低所得、イライラする状況ですよ。家の中にある。それからステップファミリー。社会的孤立。親がこういう状況になると、社会的孤立と書いてますけど、例えば親族から見放され、地域から見放され、関わる人がどんどん少なくなってきました。

次は親子関係、子育てに前向きになれないような養育能力の低さとか意識の低さ。子どもより自分の楽しみを優先した生き方をしたい。予期しない妊娠出産。つい最近、車に乗せたままパチンコへ行行って亡くなったお子さんがいらっしゃいました。ネグレクトで死亡ということになります。自分の楽しみの方を優先してしまった。予期せぬ妊娠、歓迎されていない結婚

は、出産そのものが危険になっていて、自宅出産を選ばれる方も出てきます。

社会の要因。これは本人がそうおもっているということですが、個人の生き方を尊重している社会になっているのに、なぜそれに私は乗っかってはいけないんですかってことです。ネット情報が正しい社会。保育者の方は、保護者から言われたことはないですか？「ネットにはこう書いてあったんですけど」って。「先生はそういうけどネットにはこう書いてあったから、ネットの方が正しいんじゃないですか」。しかもそこに花丸付いてますよ。無関心社会・監視社会。これもちょっと気にしてほしいですね。特に監視社会です。「例え間違っているとしても構いません、子どものために通報してください」。あれで、しんどい親は何かって、真面目な親です。虐待をする親はあんなのはあまり気にしません。真面目な親ほど気にして声を出してはいけないって。子どもが泣き始めたらマンションの窓閉めないといけない。私が聞いた話、保育士さん達との相談の中で聞いた話だと、布団をかけた親や、食べ物を口に入れた親もいます。虐待を疑われるのが嫌だから、監視されるのが嫌だから、そういう反応をしてしまう親もいるということです。また繰り返しますが、これはどれか1つあれば虐待をするということではありません。ここは頭に入れておいてください。

共通項としてこんなことがよくありますよということで、そこは誤解してほしくないです。これがあれば虐待を疑うってことではありません。結果論です。虐待をしていないかのように見える人たちの中にもこういう人たちはわんさかいます。今出てきたようなことは。それでもなんとかしたのはなぜかと言うのが必要だということです。

## 5. 虐待相談の状況

子どもの虐待の相談件数が、最近ものすごく増えています。児童相談所、これが市町村です。市町村は途中からですが、この辺で児童福祉法が変わりまして、市町村が子ども家庭福祉の第一次的窓口になりましょうということになり



ました。5年前くらいから、児童相談所が急に増えました。第1次的窓口であった市町村を超えて今児童相談所のほうが、ついに16万の手前まで来ました。かなり差が付きました。

児童相談所が物凄く増えた理由はなんででしょうか。おそらく2020年度はさらに増えると思います。角度がもっと上がるかもしれません。同じように声を出してですね。さっき当たらなかったからって席変えたりしないで、与えられた環境の中で考えてみてくださいね。

（フロア：虐待が増えているから。） 実は虐待が増えているかの検証はされていないんです。もっと制度的な理由があります。（フロア：相談件数が多い） 相談がいっぱい来るようになった。なぜ？

（フロア：地域からの通告が増えた）  
増えたのは地域ではないんです。増えたのが1個あるんです。どこでしょうか。今通告のトップにきています。児童相談所の。児童相談所の通告はどこから来ているのでしょうか。警察です。警察なんですよ。何でもかという、虐待の定義を5年程前に変えたんですね。心理的虐待の中に、大きなものを入れたんです。子どもの前でDVがある状態は子どもしんどいよね。傷つくよね、大好きなお父さんお母さんが喧嘩していると。それを虐待に入れようと、面前DVです。結果それでものすごく増えたんです。

子どもの虐待、目に見えるタイプの虐待であれば地域の人たちは児童相談所や市町村に言うことが多くなります。DVだとどこになるか。警察なんですね。子どもの相談窓口のところにはあまり言わないですね。「面前DVは虐待なので児童相談所に連絡しましたっ」て人はあまりいないと思います。警察は、一般に市町村よりも児相に通告する傾向があります。これが非常に大きいです。

あとはもう1つ、「件数が増えた」と言われたんですが、疑わしいという目を持つ住民が増えたという意味ではとりあえず正解だと思います。気にする人たちが増えた。さらにそこに電話相談を入れた。189というダイヤルを作った。これが去年の12月、有料から、無料に

変わりました。なのでさらに増える可能性があると考えています。

それから、面前DVによる虐待件数が増えた結果、この辺までは身体的虐待が最も多かったのですが、今は心理的虐待が最も多いです。中身も変わりました。これが児童相談所を苦しめていることになっています。



## 6. 虐待による死亡の状況とこうのとりのゆりかご

虐待による死亡。世間では最近増えているように感じている方もいるようですが、決して増えていません。ピーク時に比べると減って、今は横ばいです。50人くらいを挟んで、上がったたり下がったりの状況です。明らかに減ったのは心中による虐待です。これは減っています。これも頭の中にいれていてください。日本の定義では、厚生労働省の考え方では、心中による死亡も、虐待死と捉えるということになっています。中身がさらに違いますんで、データとしては別々に出すけども、トータルでの死亡件数は足したものを示しています。子どもが死亡したということですから、親が助かった場合も子どもが死亡していれば心中による虐待死に入ります。正しく言えば、心中等です。

虐待死亡を見ると、18歳までが対象ですが、3歳以上でとっています。見てもらおうと3歳以上が結構あったのですが最近はかなり減っています。特に中高生が亡くなることはほとんどなくなりました。小学校高学年くらいまでです。上がったたり下がったりしながらも、ピーク時よりは減っているのですが、気になるのが、0日児死亡です。0日児の死亡がなかなか減りません。

熊本に慈恵病院があります。今度、内密出産制度を導入するかどうかでテレビ新聞をにぎわしていますけども。10 年程前「こうのりのゆりかご」（通称、赤ちゃんポスト）がつくられた。その利用も多いのは、生後 1 週間未満の子どもです。ゆりかごさんの場合、お医者さんが立ち会っていませんから、いつ産まれたかようわからんお子さんがいらっしやいます。まずは新生児に近いよねっていうお子さんたちが結構います。

ゆりかごの利用と、0 日児死亡に共通していることは、何だと思いませんか？ちょっと質問が大きすぎるか。どちらも、どんな出産をしていると思いませんか？これは具体的で答えやすいかな。どこで産まれていますか？家ですよ。病院出産で 0 日児死亡があったら、医者は大混乱です。短くなったとはいえ、早くて 3 日、大体 4、5 日は入院していますからね。その間で虐待で亡くなられるのはほぼ有り得ない。ということは自宅出産。想像してみてください。まず、自宅出産で赤ちゃんが産まれたら何をしないといけないですか？（フロア：へその緒を。）そうですね、へその緒で繋がっていますから、まず切らないといけない。何で切りますか？（フロア：はさみ。）ハサミで切りますね。そのハサミは綺麗ですか。汚いですか。（フロア：汚い。）汚いハサミで切ります。切った後どうなりますか？出血ですよ。どうやって止めるか。何かしないといけないですね。（フロア：自分のタオルとか？）そうです。タオルとか座布団を押し付けて止めるんですよ。わざわざばい菌を擦り付けているんです。自宅出産は色んな意味で危険で。私はゆりかごは積極賛成派ではないんです。なぜかという、命を救われているのか、危険にさらされているのかようわからんのです。ゆりかごまでたどり着いた子は救われます。ゆりかごまで行った子は間違いなく安全です。でも届かなかった人、ゆりかごがあるから自宅出産を選んだ人たち。

ゆりかごの報告書の中に書いてある事例で、車中出産というのがあります。遠方の方が、「産まれそうだ。でも育てることが出来ないからゆ

りかごに行こう」と、高速道路を飛ばします。途中で破水します。もうだめだ、意識が朦朧としてガソリンスタンドで一休みして、また走り始める。「たどり着いてよかったね」、そう思うけど、本人も子どもも周りも死ぬ可能性があった。事故にあって死ぬ可能性も。

ゆりかごが安全かどうかってことをもうちょっと考えていかないとけないし、慈恵病院を責めるのではなくて、慈恵病院だけの取り組みでいいのかどうかという考え方。もっと近場にあれば安全性が高まるかもしれない。色んなことを考えます。

虐待の検証に関わって色んなことを考えさせていただきました。0 日児死亡はどうやって減らすことが出来るのかな。自宅出産の選択をされる方は、ほぼ 100%妊娠の届け出をしていません。母子健康手帳も持っていません。医者に掛かっていません。妊婦健診もしていません。ということは、制度上、そこに妊婦さんがいるかどうかわかっていないんです。近所の人にも分からないような生活をしている人が多いです。

世間はゆりかごも含めて、「10 代の親に問題あり」と声を上げる男性も女性も多いですが、違います。意外と 30 代 40 代の方も多いです。なぜか、世間体です。知られてはいけないような状況が、役所に生きづらくするわけですから、知られてはいけないような状況は、10 代以外でも起こるよということです。

これはゆりかごの報告書の中に書かれていることで、正確な数字ではないですが、意外と人権関係の仕事をしている人も多いです。そのほとんどが不倫です。人権の仕事をしているからこそ言いづらいという状況があります。

## 7. 虐待支援で気にしておくべきこと

今日、1 番お伝えしたかったことに移ります。虐待死亡検証に関わって感じている最も大きな問題は、想定外の出来事は親子の側ではなくて支援者の側だということです。分かり辛い表現かもしれませんがね。コメントを求められたときに、今回の事件の特徴はなんですかと言われる

たら、大抵私のコメントは、「児童相談所や市町村、国が出しているマニュアルに従って動いていなかったからです」、「今までこうしなかったことがあるんじゃないですか」、「いや大体想定されていたケースです」よ。

たとえば、アセスメントシートが残っていない。面接もアセスメントもしたけど、その記録が残っていない。住所が変わったときに情報を送っていない。48 時間以内に目視しましょうねというけど、人が少なくて目視できませんでした。やるべきことをやっていなかったことによる死亡がほとんどです。想定外の出来事は支援者の側に起こっているんだということです。

ここから先の答えが私と多くの委員さんは違ってくるんですが、世間の人たちも含めて多くの人たちは、だから制度を変えないといけないう方向に行きますが、私は「制度を変えたらまた危険になりますよと。制度を周知する期間をきっちり取った方がいいんじゃないですか」という考え方をしています。

今のままでいいと思っているわけではありません。極端にいうと、毎年のように制度が変わってしまっているんですね。児童相談所でいうと、平均で言うと5年くらいで異動されるんです。未経験者が非常に多いということです。前の方法が参考にならないような、蓄積が出来ないような変更をしていいのかどうか。しっかり今の状況を定着させるだけでも減らすことが出来るとおもっています。だから変える必要がないというわけではなく、変えないといけなけれど、定着を図りながら変えないと難しくなりますよということです。

次は、虐待の支援で意識しておくこと、です。独創性はありません。色んな人が言っていることです。当たり前のことですが、経済的要因やさまざまな問題に影響します。お金が無かったら夫婦関係もぎくしゃくすることが多いです。親子関係も。社会的孤立も同様にいろんな問題に影響していきます。孤立するのは選ぶかのような選択をされる保護者の方もいらっしゃいます。DV 家庭では虐待が多いです。乳幼児期の

ネグレクトは死につながる。大人は自分の非を認めるのが苦手である。虐待はさまざまに組み合わせる。暴力的であろうが愛着的であろうが完全に支配されていると、本当のことを言いにくい。他の対応方法がわからず、無自覚的に虐待をしている人も少なくない。これは体罰なんかもそうですよね。自覚的に体罰をしている人もいるけど、無自覚の人もいます。

次の2つは観点が違うのですが、人間には回復力がある。これを信じて私は仕事をしています。虐待をする親でも回復する力を持っているはずだ。人はみな楽しく生きたいと思っているが、楽しさはみんな違う。何を楽しく思うか。辛いことは比較的共通しています。でも楽しいことは人によって全く違います。こうしたら楽しくなるよというようなものに私の中にはない。この人にとって楽しいものはなんなのかということを考えていかなければなりません。親の子育て力を信じること。

「後で言います」とさっき言った部分ですが、私は虐待の連鎖という言葉は基本的には使いません。その人たちもしんどいし、私自身連鎖すると思っています。

皆さん方、今の体罰や虐待の基準を見たときに、親に体罰や虐待をされずに育ったと自信をもって言える人はいますか？自分がお子さんがいらっしやったときに、虐待をしなかった、強い言葉がけをしなかった、全くない人はいますか？ほとんどないと思います。私自身もそうです。定義を用いたらほとんどの人が虐待をしているのではないかと思います。虐待は誰でもする可能性があります。

偶然、今虐待をしていないから、その人は連鎖と言われなくても、虐待した人だけを調べると、もともと多くの人が虐待を受けていますから、「親から虐待を受けていた＝虐待の連鎖」となる。

ほとんどの人が虐待の芽を持っていると私は思います。人間の中に虐待を生じさせるコップがあると思ってください。不安定なコップ、下が丸いようなコップ。その大きさが人によって違います。大きな器もあれば小さな器もあり

ます。そこに、虐待の要素がぽつぽつと入ってきたら、不安定になって、倒れたときに虐待が起きる。多くの人はそのコップを支える多くの資源をもっているんです。友達や専門家、親せきがいたり。制度を含めて環境が支えてくれてるけど、その部分が1つずつ外れていったときに、非常に倒れやすくなる。

器が小さい人は早く起きるし、大きな人は時間がかかる。支えがなくなると傾いたり揺れやすくなりますから、揺れる度にコップの中から虐待の芽がこぼれ出てくる。傾いたままだと、ちょっと芽がたまとするとすぐにこぼれ出ることになる。

虐待は全ての人がやる可能性があって、ただそれを起こさないような環境が整いやすい人と整にくい人、整にくい状況がある。お金なんかがなくなってきたらふらつきやすくなってきます。DV もそうですね。



## 8. 虐待支援と保育者

最近、福祉とか心理とか医療とか教育とか、いろんなところで共通して使われている言葉ですが、レジリエンス、ストレングス、エンパワーメント。何かって言うと、その人の力を信じて、発揮しやすいような状況にしましょうと。本人の中だけでなく環境を含めてですね、いろんな制度を使って力をつけていくというのかな。

福祉領域ではストレングスというのが非常にはやっています。私はレジリエンスを良く使うのですが、根っこはよく似ていると思ってください。いろんな言葉を使うけども、それぞれが環境の力を借りながら自分の力を発揮していく、共通するのはそんなことかなと思っています。

ます。どの言葉がいいのかってことは気にしないでいいです。本人には生きる力があるって、それを環境によって支えていく。

かつてであれば、本人の内的な力を高めていこうという考え方が強かった時代もありましたが。それを否定しているわけではなく、環境も使うということです。問題は環境と個人のぶつかり合い、接点のところで起こっているんですよという考え方をしています。子育て力が低いのではなくて発揮出来ないという視点。阻害要因を個人の内部を中心ではなく環境との関係に見る。働きかけは個人だけでなく環境との関係の構築。環境とのバランスをとっていくというところから。個人や家族のマイナス面ではなくてプラス面に着目していくと。さきほどの例には入っていませんが、オーストラリアのソーシャルワーカーの人たちが考え始めたもので、日本に入ってきたときは、心理の人が使ったのが、SoSA、(サインズ・オブ・セイフティー・アプローチ)です。安全のサインを求めてという訳をしている先生もいらっしゃいました。最初に話した安心・安全・安定にもつながっています。

マイナスを0にしようという発想ではなくて、今が0であって、どうプラスを作っていくか、今の状態からいかにプラスの要因を高めていくのか。プラスの環境をどう設定していくのか。そこに力を置いたような支援が今は求められると私は思っています。

本人にとって支援者は大きな環境です。保育士さんや行政の方が。本人が環境の力を借りていくことは、先ほど話しましたが、支援者も環境の力を借りて支援するということです。「私が」と思わずに、「みんなで」。

ちょっと視点が違うかもしれませんが、保育者の方が多いとさっき気づいたので。ちょっと話をずらししますと、保育所保育指針と幼稚園教育要領と幼保認定型子ども園教育法という、去年から新しく動くことになりました。1年経ちました。いろんな研修を受けられたと思いますが、五領域、ねらい、内容、ほぼ共通していますよね。内容は12くらいのところで違いますが。

中身が違う所は2か所だけです。施設の名前と職員の名前だけです。あとは全部一緒です。やっていることは一緒なんです。施設の名前は仕方ないです。職員の名前のところで、ひとつ大きな違いがあるんです。私は保育指針のところのワーキングのメンバーだったんですけども、私は実は最初は少数派だったのですが、一生懸命主張したらなぜか多数派に。ほとんど主張したものは落ちていきましたが、数少ない残ったものが、職員の名前のところでした。幼稚園は「先生」と書いてあるのに対して、認定こども園は「保育教諭等」、保育所は「保育士等」と書いてあります。「等」を入れるかどうかで、委員の意見は分かれました。流れは現場の先生も含めて、「等」を外したほうがいい。「等」があるから、保育は誰でも出来るように思われてしまうんだ、低くみられるんだと主張がありました。私は「等」に意味があるから残すべきだと主張しました。なぜか。ひとりでやるのではないんですよ、チームでやる、色んな職種で一緒になって、作業員さん、給食の先生もですね。一緒になって保育を作り上げていくんですと。自営業にさせないでください。みんなで、地域の人も含めて子育てをしていくということがあるはず、といました。

支援者もいろんな人たちの力を借りながら関わっていかなければ、皆さん方は虐待の専門家ではないんです。専門家になろうという意欲は大切ですが、専門家ではない。保育ソーシャルワークということが、私たちの業界では揺れています。保育ソーシャルワークを保育士が担うのかどうか。保育ソーシャルワーカー学会でもありましてですね、保育士をベースにして、保育ソーシャルワーカーを認定する。意欲的でいいなあと思いつつも、そうすると保育士がソーシャルワークをやることになってしまう。これ大丈夫ですか？

一昔前、保育カウンセラーがあって、保育士が心理職をやるというイメージの研修がありました。いつの間にか消えてしまいました。「やっぱりカウンセリングは心理の専門職よ」ということがある程度理解されました。スクー

ルカウンセラーも、一時期は退職した先生方がやっていた時期がありましたが、ほぼこれは専門職になっていきました。支援者もいろいろな人の力を借りながらやっていく、話がそれてしまいましたが。

## 9. 児童福祉法改正と市町村の窓口

スライドがあと3枚あります。あと2, 3分しかないですね。これちょっと覚えておきましょう。児童福祉法が変わって今、市町村の窓口がどんどん変化していっています。これも私は整理しながらやるべきだという主張なんです。作れと言う方向で制度が変わってしまいました。市町村はまず児童福祉法で子ども家庭福祉相談の第1義的な窓口ですよと書いてありますので、それは全ての市町村で実現していることになります。

それから、母子保健法が変わりまして、一般には子育て世代包括支援センター。地域によってはネウボラと呼んでいます。法律上は母子包括支援センターです。ここが虐待の窓口になってください、積極的にになってください、子育て世代を包括的に支援していく、そんな感じのイメージを作ろうと。市町村には地域保健法に基づいて、保健センターをおく義務が、絶対ではないですが、かなりあります。乳幼児健診の窓口とか。福祉事務所。これは市の場合は必ずあります。町村はないところもあります。

福祉事務所には家庭児童相談室が9割方、80何%はあります。地域の子どもたちの相談に応じる。それから、虐待等にかんして、虐待以外も含めてですが、要対協。要保護児童対策地域協議会、調整機関というものになっています。今回新しく子ども家庭支援拠点を、国が義務ではないけども、2, 3年かけて全ての市町村に作りたいという意向を示しています。

子ども・子育て支援法で利用者支援事業特定型、これは民間がやってもいいですが、調査をしたらほとんど行政がやっているわけです。それから母子保健型もあるんですが、これは国の通知をみたら、子育て世代包括センターと一緒にやったら？と書いてあります。実際一緒にな



っているところが結構あります。

最後は、地域子育て支援センターとか、広場ですね。これは行政が直接やっていることではないです。あるとしても公立の保育園がやっていて、役所の中でやっていることは限りなく0に近いです。虐待に関係するものだけでも、これだけの相談窓口等があるということです。これをどう整理していくのかっていうところが市町村の課題ではないかと思っています。

#### 10. 支援者の自己覚知

支援者は成育歴と葛藤しながら支援をしていきます。自分がどんな育ちをしたか(生育歴)によって見方が違うんです。私はスーパー貧乏人と称していますが、貧しい家で育ちました。家の中に雪が入ってくるような、雨になったら布団がいつも濡れているような家で暮らしてきたんですけども、そうすると、子供の貧困がなかなか理解できないんですよ。「この状況を貧困と考えないといけないんだ」って。一回頭で置き換えないと、つい「大丈夫」って思ってしまう。でもそれを出してはいけないということで葛藤しています。

学校や研修会ではこう教えてもらったけど、

そうまくはいかないなと、葛藤します(専門教育)。さらに、所属機関の考え方。「虐待があるなんて」、「通告しないほうがいいよ」って園長先生が思っていたら、若い人はなかなか通告しにくくなりますよね。そこには出来たらスーパーバイザーがいてほしいのですが、SVさんとまた葛藤する。SVさんと所属機関が一致していたらいいけど、ずれたりしたら。いろんなことが起こってますね。ワーカーさんやみなさん方が苦しい。

それから子どもに向き合いたいけど、就学前だったら、結局保護者に向き合わないといけないことが多い。子どもと保護者が一致をしていない。専門家が見る子どもと保護者がみる子どものイメージが違う。そこによってさらに葛藤が生じる。そういう葛藤の中で生きているということを感じて欲しい。これは心理の専門用語ですが、自己覚知。自身がどのように歪み、偏りがある人間なのかを意識して、それをSVさんにコントロールしてもらってという形で取り組んでいただきたいなあとと思っています。

ということで、3分ほどオーバーしてしまいましたので、終わりにします。ありがとうございました。

### ストップ虐待・親支援のあり方検討会議

#### <日本女子大学 虐待支援研究班>



## パネルトーク

司会：西智子、パネリスト：山縣文治、後藤英一、吉澤一弥

司会：パネルトークを始めたいと思います。まず山縣先生の講演に対する感想を吉澤先生、後藤課長の順でお願いします。よろしいでしょうか。

吉澤：私としては共感するお話しや新しいことも伺ったと思っております、それについてお話しします。想定外は親子ではなく支援者側で起こるという話がありました。私も虐待関係の活動を始めてそのように強く感じています。虐待死事件の検証結果が国や自治体から公表されていてそれを読むと、支援する側の問題が指摘されています。虐待でいえば防止ネットワークとして、厚労省が要保護児童対策地域協議会（要対協）の図式を作っているのはいいですが、虐待死事件に代表されるように、それを本当に具体的に個々の事例において実行しているのか、働いているのかということが常に疑問になります。虐待死事件の検証結果として明らかになったのは、要対協が実際に機能していないどころか、個別のケース会議が行われていない、記録も無いという実態です。したがってほとんどの場合、厚労省のネットワークが存在しなかった、図式が絵に描いた餅だったというように感じています。そこは支援者や専門職が関わる連携の問題ですので、誤った連携意識を変えないといけないと言うのが、私の考えですね。山縣先生のお話しに強く共感したところです。

もう一つは、虐待のコップの話が印象的でした。器の大きいコップとか器の小さいコップとかさまざまあって、周りの状況次第でコップが揺れたり水がこぼれたりします。揺れなければ、こぼれないので衝撃を緩衝する仕掛けやシステムを作るといふ、話としては比喩的ですが、まさにその通りだなと思って聴いていました。

その他後印象に残ったのは、支援の専門職が自分の固有の専門分野の知識だけでなく、他の専門家の力を借りながらその場で機能する

という連携の質のお話で、そこまで考えないと本当の意味で最善の利益を追求するには程遠いというような感じを持ちました。以上です。

後藤：世田谷で保育課長をしております。後藤と申します。よろしく願いいたします。先生のお話し、ありがとうございました。世田谷区、来年の4月から、児童相談所を区立で始めて行くということで、江戸川区と荒川区さんとで、3か所でいよいよはじまるといったところで、私の所属ではないのですが、子どもの分野ということで、課長さんたちと連携しているところなんですね。だから今日のお話しも、いっぱい連れてくればよかったなと、今ちょっと有難かったと同時に後悔しているところです。それで、感想を含めてですが、児童相談所の方に警察が行くということで、区市町村の窓口、うちだと子家セン（子ども家庭支援センター）といっていますが、そちらとの結びつきって、お話しだと意外とないのかなと心配になったところです。それから、後半の方で、私も共感できたのが、制度を変えるのもいいけども、周知期間を大切にするという話のところですね。これは本当に、すごく思います。幼児教育の無償化とか、保育でも制度がいろいろと変わる中で、スピードをとっても重視するあまりに、色々な弊害が起きています。なぜ一緒にいいことをやろうとしてるのに、変な事になってしまうのかってことを、パターンの、世の中の的にそうなのではないかと感じたところで。社会全体がそういう感じがあってですね、不安でドキドキするようなことがあると、すごく思いました。

地域の子育て支援事業は、あまり自治体で行っているところはないということで、区立保育園は世田谷区に今48か所あります。自治体の中でも非常に多いと思うのですが、昨年度、区立の今後の在り方ということで、今後の方向性、何をしていくのかということ。その中で

在宅子育て支援の充実だとか、地域交流事業の見直しを含めて、児童相談所に関することもありますので、いろいろと頑張っていこうと一体となっているところです。さきほどのカウンセリングが、専門家の方をお願いしたほうがいいのかというところ、これは現場で日々対面しているお子さんと保護者と、我々保育士がどう向き合っていくべきなのか、そういったところもせっかくの機会なので、お伺いできればと。そういう感想を抱きました。

司会：お二人ともありがとうございました。揺れないコップの視点ですね。それから支援者の環境をどう作っていくかの大きな問題。制度の問題は、次々足し算されている現行の制度と感じています。住民の方、親子の方にとって一本化を図るためにということで、たくさんの包括支援制度ができています。山縣先生のお話でも言葉が控えめながら、新たに次々できている制度に対して非常にクエスチョン（疑問）を投げかけられた部分もあったと思います。今お二人の先生から出た支援者の環境の問題ですね、揺れないコップの問題と、今後の制度の問題について、先生のご意見をお願いできますでしょうか。

山縣：私が言いたかったのはですね、今一部の人たちが考えているのは、虐待をしないために親がどうあるべきかみたいな、コップを支える話ではなくて、コップの中に虐待の要素を溜めないための支援をしているような人がいる気がしています。それは間違っていると思えないけど、生活をしていたらストレス要因が必ずある、それをなくすほうがむしろストレスになるかもしれません。溜めてはいけないと思う方がストレスかもしれません。溜まる物だという自覚の上にコップを支える環境を保育園なり幼稚園なり支援センターなり、子育て支援事業なりで、どう揺れても支える資源がすぐそばにあって、その人が気が付かずとも、支える人たちが、ちょっとうちではしんどくなったよ。こういうグループが一緒にやってもらったら有難

いね、という感じのネットワークをどう作っておくかというのが、ここでは重要ではないかと思っています。ストレスを溜めない方向の支援ではなくて、ストレスは溜まる物である、でもそれをためても倒れないコップをどう作っていくかが社会の側の仕事だという気がしています。決して溜めないことをやる人たちを否定しているわけではありません。それはそれでやっていただいてもいいけども、福祉の仕事ではないのではないかということです。

それから、後半の方の、世田谷の方の話で言うと、私がことばが丁寧に伝えられなかったかもしれません。虐待の死亡が減っている理由は、私は国が市町村施策をたくさんやってきて、それに市町村が多く乗かって努力をされたことではないかと思っています。たくさんの事業をしていることは認めています。例がまずかったのですが、拠点事業を区役所でやっているのはあまりありませんよということです。公立の施設ではやっていますよと。区役所の中で拠点事業をやっているところは、例はあるのですが、やってもほとんどが民営化ですね。区役所の場所を借りて社会福祉法人がやる形ですということを言いたかったんですね。

その関係で言うと、今まで20年間の特徴の1つは、福祉関係でいうと、シングルゲートという言い方をしています。窓口を1つにして一元化して、住民が混乱しないように、そこに行けば全てさばいてくれるような仕組みを作りましょうということを言っていたはずなのに、なにか最近いろんなところにいろんなものがたくさんできていて、今までのやり方はどうなっていたのって感じが出てきているんです。私はシングルゲート派ではないです。元々はいっぱいあってネットワークを作っていたらいいと。色んな窓口の性格があって、あそこには行きにくい、保健センターには行きにくいけども、区役所なら行きやすいとか、色んな人が行ける場所があるはずです。そこで情報が共有される仕組みの方がいいのではないかと。Aの機関に行って、何年何月生まれでうちの子は保育園に行ってます、過去にこんなことがありまして。



ああそうですわかりました、そしたらうちでは専門外なのでそっちに行ってもらえませんか？となって、また同じ話を全部しないといけないのがまずい。その情報、こういう人が行くよ、こういう背景を持っていますので、そのことは聞いておりますからというネットワークを作っておけばいいのではないかと考えていますが、今はネットワークを作る話はあまり出てきません。子ども家庭支援総合拠点か、もしくは子育て世代包括支援センターが大きな窓口になるんだろうなというイメージになっています。さあ、それで大丈夫なの？と不安を持っています。

司会：ありがとうございます。私もまさしく同感です。吉澤先生は、日本多機関連携臨床学会というものを立ち上げていらっしゃるので、その辺のお考えをお話いただければと思います。

吉澤：連携は、2人だけで行う場合のように構造がシンプルであればコンセンサスでうまく行くと思います。要対協のように関係機関が多く、温度差があったり問題意識が違ったり方法論が違ったりすると、一つの目的があったとしても連携はすごく難しいことが分かったんですね。複雑な連携には本当にプロフェッショナルな連携の知識やコンセプトやトレーニングが必要です。複雑な連携の代表的なものが虐待防止ネットワークの要対協ですが、一旦多機関・多職種連携を始める場合、そういうネットワークをデザインするときに、では誰がネットワーク全体の責任を持つかと考えたときに、その責任の所在の意識が現状では希薄だと感じています。誰がコーディネーターになるのかということとも関係します。そのあたりの意識が現状では非常に未成熟と感じます。これからの課題だと思います。

司会：コーディネーターの力の問題というのは、今市町村の問題でもあるので、その辺後藤課長さんどうでしょうか。

後藤：よく部署でつくる文書で、連携や協働があるのですが、実態としてそこをうまく回すためにどうすればいいんだろうなということで試行錯誤を重ねている所が現実だと思います。あまりうまく行っている例が少ないからこういう話が出てくるのかなと思っています。先ほど先生の話で興味深かったのが、いい意味の緩さというんですかね、その辺で顔の見える関係を日頃から意識して、緩く繋がっていくみたいなことをみんなが意識すれば、自然とネットワークが出来てくるのかなと思ってですね。ですが、大きい組織になればなるほどその辺を緩くていいじゃんっていうと、何ですかそれ、となるんですね。その仕組みづくりの話をうまく浸透させるためのコーディネートはどうしたらいいのかが今後の私たちの課題だなと思っています。

司会：ありがとうございます。今、緩さというキーワードが出ました。緩いけど繋がる、緩いからこそ繋がる、機能するというご意見をいただいています。そのことと先ほどの、でも保育園は保育の専門家であり、カウンセラーでもソーシャルワークでもないけれど、その要素を持ちつつ、日々親と子に向き合っていくことについて、伺いたいと課長のほうからありましたので、その2点について山縣先生にご意見を願いますでしょうか。

山縣：専門ではないので感想的なものになりますが、私が言おうとした意図を汲んでいただいて本当にありがとうございます。最初に、保育士や幼稚園教諭はカウンセラーやソーシャルワーカーではないと言いましたが、それは完全否定しているわけではなくて、ソーシャルワーカーやカウンセラーがどう物事を進めるか、どういう風に子どもや保護者を見るかという、カウンセラーマインドやソーシャルワーカーマインドという言葉がありますが、それは身に付けてほしいんです。それは協働のためにです。相手がどのような思考回路を持っている人かということを知っていなければ、なかなか話

は出来ないと思うんです。言葉も出来れば共通させたいなと、共通言語があると誤解が少なくなるよと。同じ言葉を使っているけど、実は違う気持ちで使っていることって結構あります。それをやっていくことでじわじわと連携が出来るようになると思います。

それから、緩さはとても大事な要素で、ピンと張った糸って実はめちゃくちゃ弱いんです。緩い糸は、揺れようが何しようが、ちょっと問題が生じようが、意外と長持ちするんです。揺れることによって立っている。揺れなければ倒れる。そういう意味で緩さは非常に重要で、緩さは他の人も入りやすくしますし、次の要素が入ろうとしても、今までの緊張したきちっとした関係なら入りこむ隙間がないです。一生懸命場所を探さないといけないけど、緩かったらどこかに入ろうとしている専門性を持っている人たちの役割が見出しやすくなる。抜けている所も気が付いたときにはここ足りないから入れようねってなって、縄張り意識は緩さには出てこない。私は緩さは非常に大切だと思っています。

連携でも、親の支援、関わり方においても。専門家ではないので言いづらいのですが、間違っていたらごめんなさい。相談に対して答えを出さない相談の受け方が、という言い方をします。聞いてあげて、吐露してもらおう。吐き出すことによって、ああ今日は本当にいい話を聞かせてもらいました。いや、実は私がずっと聞いてたんだけどなって。学生なんかもそうです。最後に、わあと泣いて、先生ありがとうございましたと。泣かせたかな？と思うんですが。でも、そうして答えを出さないで、自分がいっぱい言ってみて、その中でやりたいことを見つけ、じゃあ次はこうするんだね、と声をかけてあげる。こうしたらどう？って言ったら、それが出来なかったときにまた自分を責めてしまいます。多くの人は自分の中に答えを持っていて、その部分を応援してあげて。それで仮にうまくいかなかったとしても、あなた他にいくつかのこと言っていたよね、と。まだチャレンジ出来ることいっぱいあるよね、という声かけの

仕方が。緩やかさが、ネットワークにおいても直接的な支援においても非常に重要ではないかなと思っています。

司会：ありがとうございます。自己決定の原則というところに言葉としては行ってしまうんですが、面と向かいながら提供しながら、相手を尊重していく関わりを、非常に強調していただいたと思います。山縣先生のお時間があまりないのですが、フロアからご質問ご意見があればと思いますので、ぜひいかがでしょうか。それぞれの専門性が緩やかにつながりつつ、また顔が見えるとか、そこでコーディネーターは市町村どうして行くんだという課題とか、それから要対協の実質化みたいなところがポイントとして出てきましたし、保育者のストレングス視点によるエンパワーメントしていく力みたいなものも、共通で持っていたらということも出ていますが。はい、では木本会長お願いいたします。

木本：試行錯誤しながら地域のことに取り組んでいますけども、その中で支援者が一方的に支援するよりも、同じ問題や課題を抱えた人たち同士のピアサポート的なものがうまく行くのではないかなと思って考えています。最初に始めたのが、支援者が双子三つ子のお母さんたちを、もう20年前ですが。双子の会を作って、今までに200組くらいが。当事者の会をやりました。専門家がまあしなさいこうしなさいと言うよりも、当事者同士が話し合ったほうがいいかと思い、他の当事者の会もいろんなものを作っていますけども。発達に課題を抱えたお子さんを持つ方同士で集まったりとか、アレルギーを持っているお母さん同士とか。そういう、仕掛けをしてあげれば、後は自分たちで解決できる感じがします。そういうやり方でいいんでしょうかね。

司会：今ピアサポートという言葉も出てきました。当事者相互の力を集団的に使っていくということに関して、先生のお考えやアドバイスが

あればと思います。

山縣: これは吉澤先生の専門かもしれないのですが、今木本先生がピアサポートという言葉が使われました。もう1つ、似通った意味合いで使うのは、セルフヘルプという言い方をします。同じような問題を抱えた人たちが、話を聞いたり、支援活動をしていく。支援という言葉は良くないかな。していくと有効だと言われています。そこでですね、問題になったのは、現場の考え方が分かれるのは、そこに専門家をいれるかどうか。これはアルコール依存、AA。専門家を入れたグループをAAと呼べるのかどうか。専門家がいなければ、本当の意味での医療的な問題に直面したときに素人で大丈夫？って声があったり。いや、専門家がいたらコントロールするから結局セルフヘルプの要素がなくなってくるんだ、という考えがはっきり分かれています。どっちがいいかという正直分からない。私はスタート時点は当事者性はものすごく大事だと思います。ただ、その人たちが素人判断ではまずいような問題にあったときに専門家に上手に関われるかどうかということではないかと思っています。だから、否定するつもりもないけど、素人だけの当事者性だけで大丈夫かという、その危険性もありますよということをお伝えしたいです。

もう1つは子育て支援のところというと、当事者性を長く続けることは難しいですね。就学前でいうと、頑張っても5、6年ですね。初期の人たちがずっと残る傾向があるんです。当事者がもう60歳とか。今20年前にNPOを立ちあげたグループが、未だにNPOのリーダーをやっています。これ大丈夫かなって、これは当事者グループから支援者グループに変わっていませんかと、世代交代が難しいなあと思っています。その辺を意識しながらいくけども、当事者性は非常に重要な要素だと思っています。木本先生が言ってくれた、多胎児のところというと、私も神戸のグループに関わっているときに、多胎児の会を立ち上げる人たちと一緒にすることがあるんですが、本当にわあ知りませんで

したごめんなさいという話なんです、双子のお子さんを連れて健診に行った。双子ですから、同じ日です。お母さんは当然同時に出来るものだと思っていて、一人のお子さんを健診してもらって、次のお子さんをまた裸にしようとしたら、後ろから声がかかったんです。早くしろってお母さんの声が。立ち会った専門家、医者さんや保健師さんが、じゃあちょっと、後にしてくださいと言われて、自分はひとつ後ろくらいに行くんだ、準備が出来たらやってくれるんだと思っていたら、一番後ろに並ばされたそうです。それが専門家の声だったそうです。順番を守ってください。そこでお母さんたちは何をしたかという、双子の赤ちゃんが、健診に行くときは双子のお母さんが絶対にくっついていく。ひとりの子がやっている間に、次の子の準備をして、はいと渡すんです。それだけでもすごい良くなったと。それから、今度与論島に行くんです。そこは産婦人科の病院がほとんどないんです。那覇か鹿児島、奄美大島で出産される方が多いそうですが、私は全く気が付いていませんでした。飛行機に、妊婦さんが乗れるのは8か月くらいまでだそうです。9か月を超えたら医者が立ち会っていないといけないそうです。高速フェリーも同じような状況だそうです。そしたら、沖縄の那覇で産むときに1か月半前くらいから、那覇で一人暮らしをしないといけないそうです。子どもがいたら、子どもをどっちに連れて行くか、那覇に連れて行くのも大変、でも与論島でもどうするか。こういう環境にある人たちの支援をどう考えていくか。それは島に住まなくなるわな。本土にいたら、どんな山奥でも車で繋がっていますから、1時間半あれば、大体病院に行ける。でも橋が繋がっていない島は本当に子育てが難しいことを実感しました。すみません話がずれましたが。

吉澤: 1つだけいいですか？ 山縣先生がいらっしゃる間に伺いたいと思います。世田谷区を始め、東京都は区の児相を今作っている所なんですよ。東京都の児相の場合と、区でやる場合は色々という意味合いが違うと思います。山縣先

生がお考えになる、区で児相をやる場合のプラス面とマイナス面について、そのあたりのご意見をお願い致します。

山縣：国の方針や私が関わっている委員会は、私が委員長をさせていただいていますが、委員の強硬意見派は、中核市必置派です。私はそれは危険だと思っています。プラス面もあるけどマイナス面のほうが多いと思っています。プラス面は、身近に出来る話と、地域資源が区と対等な関係ですから、動きやすくなるのはいいと思います。ですが、スタート時点でおそらく世田谷区も児童福祉司としてふさわしい人材をきっちり集められると思うんです。でも、5年後大丈夫ですか？異動しますよ。常に異動した新人さんが中心になっていかないといけない。世田谷でだいたい5年平均なりますか？ですよ。求めているのは児童福祉司は10年ぐらい働くべきだと言っています。中核市レベルで10年同じ職場にいる公務員はあまりいないんですよ。これが人事異動の関係で大丈夫ですか。と、1回目はわかるけど2回目から舗装できますかと、私は非常に危険だと思っています。中核市のところに必ず県が設置することな

ら賛成です。職員が全体で動きながら質を上げていくのならいいけども、おそらく児童相談所に配置された方の次の仕事が福祉の仕事かどうかはわからないですね。高齢者関係の仕事に行く可能性もあるし、他のところに行く可能性の方が圧倒的に高い。その中で質を上げていく作業のところに、中核市や区の不安があつて。その分の人事問題をきっちりしなければうまくいかないのではないかと。

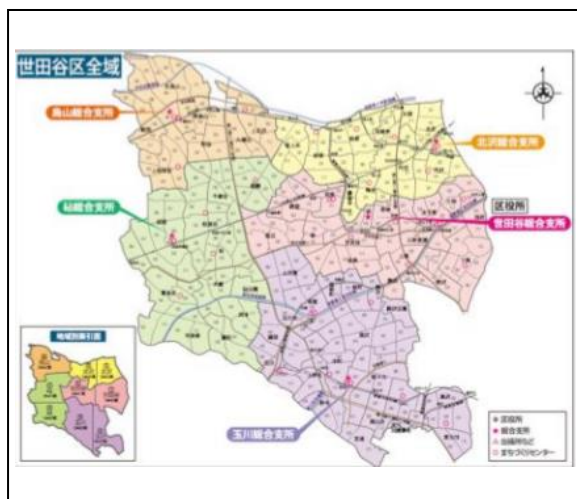
児童相談所のスーパーバイザーの義務研修があつたのですが、これは5年くらいを想定しましょう。スーパーバイザーって5年くらいですから。短いとは思っていますが。でも5年でスーパーバイザーになったときに、児相の一部の人から声が漏れてきました。何か。良かった。これで私はスーパーバイザーにならないで済む。それが現状なんですね。その人事問題や給与問題を解決しておかなければ。その中で気持ちよく質を上げていくような努力が出来る児童福祉司の体系を作っておかなければですね、おそらく崩れるのではないかという気がしています。

司会：ありがとうございました。

## 講演2 「世田谷区の保育行政の取り組み」

後藤英一（東京都世田谷区保育担当部保育課長）

<p32～当日資料>



世田谷区は23区で2番目に面積が大きく、1番は大田区さんだったかな、埋め立て地の関係で抜かれてしまいましたが。人口は90万超えました。このまま行くと、全国では人口減少社会と言われていますが、世田谷区は人が増えています。

就学前人口は横ばいですが、今後減少していくのかどうかは全く読めないといったところです。そんな状況があつて待機児童も0を目指して頑張っていますが、昨年度は470名ということで、一度ワーストから脱却したのです

が今回はまたワーストということになっています。

令和2年4月に向けて待機児童0を目指していくところですが、申込者数が全体で200名くらい増えています。無償化の影響で3歳児が増えるかと思ったのですが、実態としては減少していました。1歳児がすごく増えているところで、指数度とか、入園選考に向けてやっているところなんですけども、そこらへんでどこまで調整を頑張れるのかということになっています。

施策の方ですが、ここに出ている10の施策のなかで、特に柱になってくるかなということで丸を大きくしています。1つが保育の質ガイドラインです。それと、下の方にあります巡回指導相談、それから左上の保育ネットによる保育所間連携といったところです。順次説明させていただきます。巡回支援相談です。こちらの保育の質の向上のための支援として、各保育施設に保育園を経験している職員の方、園長先生だとか職員を中心に、栄養士看護師、チームを組んで私立の保育施設・区立の保育施設、場合によっては認可外だとかも含めて巡回をしています。これは東京都さんが通常やっている指導監査とは別物で、行って何か相談事があったときは一緒に寄り添いながらお話を聞かせていただいて、一緒にいい保育を展開していきましょうというものです。基本、施設には毎年1回以上必ず行くようにしてまして、特に認証保育所さんや新規施設については年に4、5回必要があればその都度対応しているという形になります。今後の課題は、指導的な立場と支援的な立場ということで、構えられては意味がないので、その関係の構築についてどうしていけばいいのか、巡回支援の担当の係があるのですが、日々議論しながら進めています。特に来年度の4月に向けて、児童相談所が移管になって、指導権限が東京都から全て移管されるんですね。すると今まで認可外保育施設の170ほどの指導権限についても区に全て降りてくることになります。それも合わせてどのような形で巡回支援の形を組めるのかを内部で検討している所です。巡回支援は区の直接の正規職員で19名で保育士、栄養士、看護師のチ

ームでやっていますが、なかなか他の区でこれくらいの大きい組織で支援体制を組んでいるところはないみたいで、他の区にも今後このような動きが出てくれば良いなと思っています。来年に向けては認可外の話もありますので、人員体制をさらに強化して進めていくという所で、20名以上超える形の人員査定があると思います。それで、仕組みについては1回から5回まで、チームで行くというところです。巡回支援ですが、お子さんの発達援助から保護者支援まで、幅広く園全般について一緒に考えていきましょうという視点ですので、これは違いますとかそういうことではなくて広く相談に応じながら事業を展開しています。視点についてはここに挙げているところです。

合わせて巡回指導と同時に研修ものすごい数やっています。これは区立と私立の職員一緒に来て、座学だけでなくグループを組んで討論していただいています。シリーズ物で2年間同じチームで研究をしていて、そこで座学で学んだことを園で持ち帰って実践して、その結果を持ち寄って検証していきましょうということもやっています。中堅職員の方を中心に展開しています。私立も含めた質の向上を出来ればいいなということをやっています。

それと、行政主導でやっている巡回支援や研修と別に、地域の保育ネットという任意の集まりがあります。これは何かと言うと、施設の種別は問わずに施設同士が顔見知りになり支えあうネットワークということで、先ほどパネルトークでお話した緩い関係が大切だということで、それがこのネットで実現しているかなと思っています。区内は広いので5か所に分かれて地域で保育ネットをそれぞれ展開しています。集まって日頃の悩みやテーマを設けて研修会をすることもあります。昨年度は災害、台風の話もあったのですが、お散歩ルート of 点検でチェックした結果をお互いに共有して気を付けましょうねとか。場合によっては仲良くなると園庭の貸し借り、道具の貸し借りもやっているものもあります。今後認可外保育も、そういう意味でより近くなっていくところで、区立保育園が中心になってネットが強固になっていくと保育の質も高まっていくと考えている

所です。運営は区が主導というよりは、各施設同士に集まって展開しているもので、ネットによってやっている活動も違います。その働きかけは区でこれからもやっていく話かなと思います。発足の経緯ですが、5地域と申し上げました。最初に烏山地域が、京王線の手前の方ですが、熱心な集まりが平成15年に始まっておりまして、第3者評価の内容についても検討したほうがいいんじゃないかということがきっかけになって、そういう集まりが始まったところでした。それが5地域に広がっていきました。21年に全5地域で体制が整ったということになっています。取り組み、成果・課題ということで、定例会は年3回やっていますが、情報交換含めて記載の通りの活動が展開されています。写真で具体例もあげました。防災訓練も一緒にやったりしています。

柱のもう1つ、保育の質ガイドラインということで、きっかけは区のこれまでの取り組みということで、平成17年に保育安全マニュアルを前身なる物として作っています。これは保育施設を数多く作らなくてはならないということがありまして、認可保育園だけでなく、認証保育所、そして認可外の保育施設が出来てくると。社会福祉法人だけでなく株式会社など、いろんな形態の事業者さんが参入してきたときに、やはり世田谷区の考える保育を統一的な基準として発信できるものがないと、という危機感がありました。その勉強会を平成20年に立ち上げました。その流れが委員会に繋がり、実際のガイドラインという指針が出来ました。位置づけも区の計画の一部ですよということを組織全体で知らしめて、みんなで子ども関係の所属にも区民の方にも広く展開していくということで、保育の世界の中で終わらせず、広く世間に周知していきましようといった意識も持ってやっているところです。ガイドラインは、インターネットにもアップされていますので、ぜひ後で見たいと思います。子どもの権利、職員に求められる資質など、大きく項目立てにしてわかりやすくチェックが出来る冊子になっています。

ガイドラインをどのように活用しているのかですが、子どもを中心にした保育や子どもの

権利を考えたときに、私たちがやっている保育はどういうものなんだろうと、改めて、こういう保育をやっているけどこれはどういう意義があるんだろうとか、ガイドラインに基づいてそのようなところを含めて自分たちの目で検証して、それを発表する場も必要だろうというお話もありまして、実は今週やったのですが、保育実践フォーラムということで、毎年8施設程の園に参加していただき、発表をしてもらいます。その後にみんなで検証しあうといった機会も設けています。

ガイドラインの活用の方法をいろいろ試みている所ですが、最初に作ったものが冊子形式で、後で見たいと分かると思うのですが、文字がすごく多いイメージがあったんですね。これはたぶんパッと見たら1ページ目で辞めちゃうよねというお話もずっと前からいただいていたいました。とにかく工夫できないかなというところで、漫画を作ったんです。なるほど世田谷の保育、という冊子を手に取れるような形で漫画を作ったんですね。それをネットでもアップして、区の中でも区政情報コーナーで販売も出来るようにして。新しく入園で申し込みをした保護者の方にも手に取ってもらえるように、子ども家庭支援センターにも置いてあります。全部の保育施設にもお配りして、区立私立問わずに周知しています。もしご興味があったら、1冊100円なのですが、買わなくてもネットでも見れますので、ぜひご覧いただければと思います。私も専門家ではないので、最初にこの所属に来た時に読んでこういうことなんだねというのがすごくわかりやすい印象をもった記憶があります。新人の方とか、自分のやっている行動がこういう意味を持っているので、だからいいことなんだ、悪いことなんだというところの気づきにもなると思います。

ガイドライン、巡回支援、ネットの取り組み以外にも世田谷区は保育施設を量産していて、色んな事業者さんが参入されるということで、開設の前にお話しをさせていただくことが非常に大事なかと。6、7年前に施設が増えてきたときからやっていますが、これは西先生にもご協力いただいています。開設前の支援として、フォローアップ研修、開設前研修という



取り組みもやっています。集まっていたいて、ここに記載の通りの内容についてお伝えをさせていただいて、みんなで考えていこうといったことをやっています。基本的な世田谷での保育についてお話しさせていただいています。実際に開設した後もフォローアップをしているところです。この写真には西先生はいないですね。いないですけどご協力していただいております。

はい、ということで、こんな3つの柱プラスアルファでやらせていただいています。先ほどパネルトークでもお話しさせていただいた、区立保育園が48か所今ありまして、在り方についても考えていっている現状があります。あわせて老朽化がとてと進んでいるんです。現場職員の切実な思いとして、設備が古くなっている、狭い、汚い。何とかできないかということでやっているんですが、その対応をしつつ保育の質のレベルアップを図っていかないといけないところで、どうしたものかと、一昨年1年かけて「区立保育園のあり方」をまとめていったところです。ソーシャルスキルの話や在宅子育て支援の取り組みを頑張っていきましょうなど、様々な施策を展開しようとしている所ですが、その中で課題も見えてきました。キーはやはり現場の職員が、公立保育園の在り方、役割をしっかりと考えていって、現場で受け止めてチームで支えながらやっていくことが大事になってくると思っています。根幹にあるのは保育の質だと思います。議論の中に出てくるのが、職員の方は既に大変なことをこなしている。素人から見ると保育の現場ってすごいんですよね。意識してやっていることと意識しないでやっていることが分かるだけで全然違って、それを他の人にどうやって伝えるかということを、うまく出来るだけでもみなさんの保育者の方が今日多いので、お伝えしたいと思うのですが、自信を持っていただいて、いい意味でアピールをして繋いでいただきたいなあという風に思っています。さらに、専門家のつなぎの部分で有効に生かせるところはどんどんやっていければいいし、虐待の話や保育を取り巻く環境って無償化も含めて周りはいろいろ言ったり大変な状況だったり、保護者の方も

いろいろありますから、大変になってくると思いますけど、今やっていることが間違っていないということを是非再認識していただいて、ちょっと違ったかなってところはすぐ直せばいいので、自信を持っていただいて、一緒に頑張っていければいいのかなと思っています。

保育課保育担当部も、来年の児相の移管を踏まえて、組織から離れて条例部として設置をしていこうという動きもあります。区民の方が期待されている所属になってくるので、その一翼をみなさんが担っているということ。そして区ではない所から来ていただいている方もいますが、みなさんはすごく期待されていて、やると楽しく充実した仕事だということを意識して働いて一緒に頑張っていければと思います。ということで大体こんなところで。あと参考資料をつけさせていただいています。待機児童の状況などを載せています。区の現状ということでご覧いただければと思います。すみません雑駁でしたが、以上です。ありがとうございました。



司会：ありがとうございました。お時間が少しありますので今、区の取り組みを中心にお話しただいたのですが、今のお話に限らず、これからの行政と保育現場とのつながり方といえますかね、先ほど課長のほうから緩やかなつながりが虐待をストップさせると意味でしたが、いろんなつながり方があると思いますので、行政の役割と保育現場の役割と、様々な配慮を必要とする子どもたちの対応も含めて

ご質問や ご意見、ご感想はいかがでしょうか。漫画が出ましたね。私も読ませていただきましたが、保護者の方に知らせるということで有効だなという漫画版が出ているのですが、今お話しになった制度の枠を超えて、という意味も含めましていかがでしょうか。実際、世田谷区の園長先生・副園長先生も多くお集まりですので、虐待の対応や難しい保護者の対応をしていくにあたって、先ほどコップの揺れを支援の多様化でやっていくような比喩的な言葉の中にすごく重要な要素が入っていました。そこに行政もあれば 現場の先生もあれば、他の専門機関もあれば、当事者と呼ばれることもあると思います。そういった連携のことも含めて、感想でも、ご意見いただければ嬉しいですが。今日は遠くの自治体 からも来ていただいているので、そういったことからよろしいでしょうか。

＊ 質疑応答

フロア：失礼します。私は高知県の教育委員会に保育所・幼稚園を管轄している幼保支援課という部署で子育て支援を担当しています百田と申します。世田谷さんの話は、前から聞いていてそれこそ高知県でも質の向上、保育者の先生がたと共に保育を豊かにしていくということで、参考にさせていただきながらガイドラインを作っているところなのですが、1つ聞きたかったのは、今、世田谷の中で保育所を管轄している部署なんですかね、幼稚園はまた別？保育所は世田谷でどれくらいあるのかなということと、そこを巡回していくところで、先生方と繋がりをもつということで、中にもありましたが、心がけていることとか、それによって先生方の反応ですよね。こう良かったとか、こういう所をもうちょっと助けても欲しいとか、そういう反応があったら教えていただきたいと思います。全部くまなく回るとのことなので、園によって思いもあるかと思うので、お聞かせいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

後藤課長：ありがとうございます。数については、区立は48園、私立が157、認可外保育施設は170以上ありますので、全部で400

くらいの施設数にはなってくるかと思います。待機児童の解消に向けて施設整備を進めていますので、来年度の4月でまた20施設ほど私立の認可保育園が増えていくといったことになりますので、もう何百も保育施設を全部回らないといけないといったような、前提があるということですね。受け止めの話ですが、やはり量産している所もあって、若い園長先生が非常に多いんですね。回っていて、私が回っているわけではないのですが、よく聞くのは、園長先生が孤独だったりして、相談できる人がいないケースが結構多いということで、人材定着確保の面からもそのへんの悩み相談とか、そういう受け皿にはなっているのかなと思います。保育の質って意味での栄養のお話とか調理の話とか、区立ではどうやって いるんですか、というところをお伝えしていくケースも多いですし、保護者の関係との悩みのところで、ご相談にのっていることが多いと思います。巡回にいらしていただいている先生方って、園長先生のOBの方が中心なんですね。説得力があるんです。一緒にいい保育を していきたいと思います。その入り方が、自画自賛しているわけではないですが、先生方絶妙なんですね。そういう仕組みでなんとか委員なので、って機械的に行って実現できるわけではないので、そういう難しさもあるなと思っていますので、人材をどういう人を選ぶのかというところも大事なかなと思っています。

司会：ありがとうございます。学生のみなさんも含めまして若い方からベテランの方までいらっしゃいますが、他にご意見ご感想等はありますでしょうか。

フロア：お話しをどうもありがとうございました。東京都の子育て支援 NPO 法人で、先ほど山縣先生のお話しにもありましたが、保育ソーシャルワーカーと名乗って仕事をしている者なのですが、聞きたいことが2、3点ありましてお伺いしたいです。最近国の方で、予算化された地域連携推進委員を、虐待予防の観点から保育所におかれて、そこから近くの保育所にも巡回相談を実施するような全員配置の案が来



ているのですけども、その話を世田谷の保育課のみなさんのほうでもされているのかどうかということと、巡回相談の話にもなるんですが、今の保育士のOBの方や栄養士さんや看護師さんが回られているとのことですが、専門性が違う所でお話を伺った時にフィードバックが出来るものもその方々によってさまざまだと思います。その統一性はどのようにされているのかをお聞きしたいです。

後藤課長：ありがとうございます。地域連携推進のお話ですが、予算化して配置していこうという動きは、来年度に向けてはないんですね。ですが、保育のソーシャルスキルを高めるところでは、先ほどの在り方についても、区立の定めている所で、高めるためにどのようにやっていけばいいのかという勉強会や研究会を区のほうでやっています。具体的には、大学の先生にお願いをして、集まって、例えば個別のケースに関して周辺環境として、この子の置かれている状況がどのようなものか、客観的に落としてシートを今作っているところですが、そのシートの中で状況を見て、保育士の目線から何が課題としてあって、どう対応していくかを追えるようなものを作っているところです。そして48園で共有化していこうと今後、専門家との連携をどう体系化していくかという部分は今後の課題かなと思っています。後、巡回支援のところではフィードバックの部分ですが、い

ったところで個別に返していく流れはあるので、各園で対応は出来ているのですが、共有化したほうがいいことがあったら、お便りや研修の機会を通じて伝えることもやっています。決まったフォームがあって、そこを見てくださいというようなシステムにはまだなっていませんが、そういう形で展開しています。

司会：ありがとうございます。他にご質問はいかがでしょうか。よろしいでしょうか。では補足は何かありますか

後藤課長：いえ、特段ないんですけども。緩さって本当に大事だと思いますので。私も緩さだけで50年間生きてきたのですが、うまく行っているのだから大丈夫だろうと思っているんですね。いい意味での緩さは現場で大事だと思うので、楽しもうと思って自分を充実させるための働き方をしていくと、保育の世界だけに限らずですが。人生も楽しくなるかと思いますので。何を言っているのでしょうかね。すみません、これで以上です。

司会：ありがとうございました。本当に、人生は楽しさ緩さ、私はいつも人生の最初の先生が楽しさをどう伝えるか、これが保育者の大きな役割だというのが、私のメインテーマだとよく話すのですが。お株をとられた感じですけれども。本当にありがとうございました。

### 第3回東京開催の総括と講評



吉澤一弥

講評を少し述べさせていただきます。まずは、山縣先生のお話しは、学生になったような気分で、授業を一緒に考えながら聞くような形で、のめりこむことが出来ました。先生は色んな役をやられています。死亡事例の委員だったり、保育指針の作成担当であったり。現場の実践からのお話しですので、説得力があって私もすご

く勉強になりましたし、みなさんもそう感じになったのではないのでしょうか。山縣先生には、帰る間際に 4 月に虐待禁止の法律が発行されることに関する世の中の反応などをお聞きしたのですが、先生は、いろんなコメンテーターが色んなことを言うかもしれない、虐待や体罰やしつけという奇妙な線引きが出来てしまっていて、体罰はしてはいけないけど罰則はないとか、そういうことになるらしいので、その辺を注意していきたいと私も思っています。いずれにしてもストップ虐待の活動がピークになるのはおそらく、4 月のあたりからのような気がしています。

後藤課長からはゆるやかさというテーマがありまして、私自身もそれを享受しているんですね。西先生と世田谷区の本庁にお伺いしたのですが、後藤さんにご挨拶してその足で今日の講演をお願いして、受け入れてもらえるくらい、まさにこれなんだなって、本当にありがとうございます。このように緩さが身につかれていらして、児相もうまく行くと思います。今日課長からお話しにあった取り組みですが、そういう先進的な取り組み 1 つひとつが素晴らしいと思いました。特に保育ネットとか、さまざまなタイプの保育園を地域ごとにまとまっていくというやり方もありましたし、素晴らしいなと思いました。そういう総括的なシステムの中で虐待予防に関しても展開していくのかなということで、機能していくのではと思いました。後は、楽しさをテーマにされているのも、虐待はテーマが重いだけにそういうこともすごく大事だと思います。私は連携のことを突き詰めて考えていると楽しさや緩やかさよりも、むしろ厳しさとか、そっちについ行きがちなんですけどね、緩やかの中で本当に大事な時はきちんと動くことができるような、そんなことがあればいいかなと思って聞いていました。先生方ありがとうございました。

村上千幸

ご紹介頂きました、子ども子育て支援センター連絡協議会、ここネットの事務局長をやって

おります村上と申します。いよいよ検討会議も詰めになって、山縣先生に来ていただいて、まとまったなという感じがします。現場の先生方とたくさん話をしてきた中で、最後にきりっとまとまりましたので、これをいい形で皆さんに還元できることと思います。ちょっと心配しているのは、体罰がメインに最近はなっていますが、その他の虐待がないわけではないです。私たちは体罰を禁止することが大きなテーマではありますが、その前に虐待全体をどう防いでいか、行われないように、また保護者の方が加害者にならないようにする支援を進めていこうとしていますので、あまり体罰の方だけにしてしまうと、体罰と虐待が違う物になってしまう。体罰を禁止すればいいということだけになってしまうといけないのかなと思います。

日頃の保育活動、実践が、実は虐待の防止になっていますよね。虐待場面での関わりは少ないかもしれないけど、毎日の送迎のときのお父さんお母さん方との立ち話とか、お便り帳とか園だよりとか、保護者会だったりクラスの参観だったりといろいろしますよね。毎日毎日の保育活動が実は虐待防止に繋がっていると思うんですね。虐待があったときに保育所がどう関わったという検証はないかもしれない。また、日頃の保育が虐待を防止している、貢献しているという検証はないんですね。ないけども、私たちが保育をする中で虐待防止に繋がっているのだというところから、原点から始まっていいのかなという気がします。私たちは今の仕事をしっかりと自信をもって、それが実は様々なことに繋がっていることを感じて保育の質を高めていければと思います。1 番、その前に支援者側の想定外のことであったが、子どもたちの育ちが保障されているのか、私たちがやっている日本の社会の子育てが、虐待になっていないのかという視点を持って、俯瞰して見る必要があると思っています。

昨年の WHO 世界保健機構から、日本の子どもたちにはもっと遊びをさせなさいという勧告がありましたね、みなさんご存じの通り。私たちが普通にやっていることが、子どもたちにと

って、外から見ると社会全体が子どもの育ちを保障しない社会になっているというのは、ひとつの長い目で見れば虐待的なことになるのではないだろうかと思います。要するに発達できないだろうと。またいろんな障害の問題の発生率が高くなっています。去年の東京都の高校生の90数%が近視で、増えている。中学生で75%とかですね。さまざまな社会の環境の中で子どもたちの発達が阻害されているとすれば、それは誰も分からないけども、いつのまにか子どもたちが育ちにくい環境になっている。誰の責任ではないけど、みんなの考えていることではないかなと思っています。それから、私たちの目的は子どもたちがちゃんと育つことですので、育っているかどうかきちんと検証しながら、虐待がなければいいだけではなくて、より積極的に子どもたちをどう育てるかということのために、虐待をしないということですよ。虐待をしないことが目的なのではなくて、子どもたちが育つことという目的をみんなで確認しながらですね。育つこと＝虐待がなくなることなんです。虐待をなくすことが目的ではなくて、子どもを育てることだと思うので、ぜひ長い長い道ですが、みんなで一緒に頑張っていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

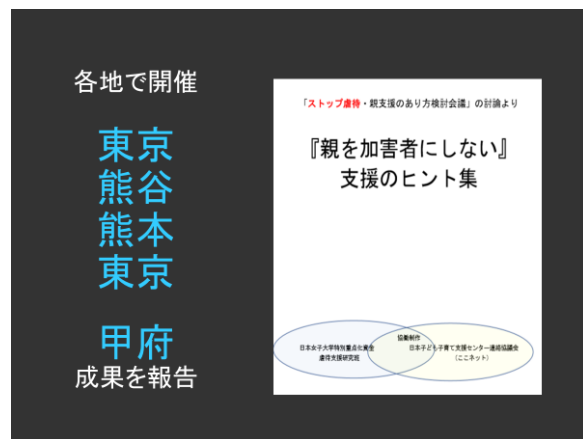
#### 西 智子

ありがとうございました。私は保育の立場で虐待や体罰について取り組むとまではいきませんが、考える立場にあります。保育の立場はやはり子どもの育ちをどれだけきちんと見守ることが出来るのか、それも保育という専門的な視点でということです。ストップ虐待の一番の根底にあるものは、村上先生がおっしゃっていた言葉に通じていると思うのですが、子どもの言葉を代弁できる保育専門職の存在だと思います。子どもの思いを保護者に伝えながら、保護者が育っていくのを見守る。保護者が社会に自立していくことを常に念頭に置いて、子どもと保護者に向き合っていくこと、それがストップ虐待の土台を作っていくのだろうと考えています。また、「困った子」と言わない、「困

った親と言わない」という視点で、山縣先生がストレングス視点を強調して話していただきましたが、そのような視点を持って、親子に寄り添う支援をしていくことがストップ虐待の土台作りになるのだろうと思います。

支援とは特別なことではなく、日々の保育を大切に親子にかかわっていくこと、村上先生に後ろから背中を押された気持ちになりました。そこをやっていけたら…と、保育者・保育学を学ぶものとして重要な仕事なのだと改めて感じました。世田谷区の後藤課長からは、行政も「保育の質」を常に念頭に置くという視点で保護者と子どもの育ちを見てくれているという、（世田谷区内の保育園数を考えますと現実には厳しいところもあるのだろうなと思いましたけども）心強さを感じました。親子が育っていくためには、保育の質も含め、きちんと向き合う姿勢を地域につくっていくといけないだろうと思います。そのために行政指導というのはある時期必要ですが、地域を変えていく底辺を作るのはやはり育っていく子どもなんです。だからこそ子どもたちを育てていくことが保育者の地域支援になると思うのです。

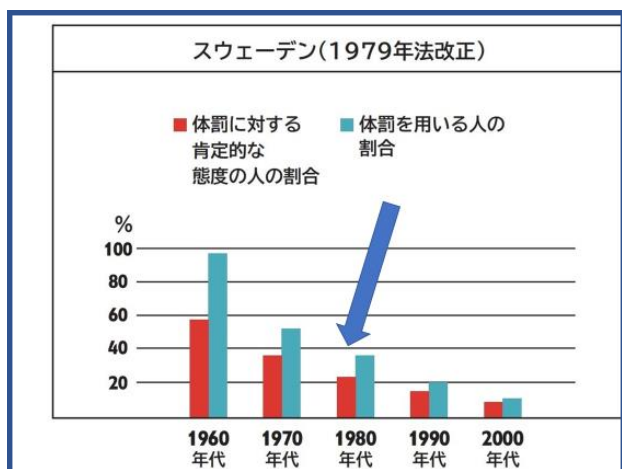
吉澤先生がいつも、日本に20年で体罰がない文化を作れるかねえって、スウェーデンは40年かかったけれど…とおっしゃっていましたが、体罰がないという問題だけではなくて、体罰をしなくていいしつけ自体をみんながサポートできるような地域づくりをしていくことが必要でしょう。行政が最初に体罰なきしつけの文化を主導しつつ、そこで育った子どもたちが「しつけ」って、時にはたいたり叱ったりしてしまうけれども、それを「悪いことしちゃったね」って、お互いが支えられるような関係性が作れたらいいのかなと思います。私は先があまりないので、若い先生方にすごく期待をして、この会を終わりたいと思います。今日は先生方、本当にありがとうございました。



そもそも・・・

- 東京目黒区5歳女兒、千葉県野田市小5女兒など相次ぐ虐待死事件
- 体罰禁止と懲戒権の見直しの法改正の動き

- 2020年4月に「体罰禁止」発効
- 連日のマスコミ報道  
議論百出
- 育児現場と子育て支援現場で不安・混乱



現状と課題分析

- スウェーデンでは、体罰禁止の法律ができるまでの50年間、体罰禁止の議論をはじめさまざまな社会活動が行われてきた。
- その中で市民は、体罰がこどもの教育や自立にまったく意味を持たないことを学んでいた。
- 法改正はスタートではなく着地であった

- 1979年に、政府の体罰禁止の大々的キャンペーンや、牛乳パックに体罰禁止をプリントした話は、**ダメ押しの意味**

- 日本における4月の「体罰禁止の法律」発効は、**スタートであり意味が全く違う**

### なすべきことは？

- 専門家の講演を聞き(**正しい最新の情報**)
- 上から与えられるのを待つのではなく、実践者が集まって考え(**エージェンシーの獲得**)
- アイデアを出し合い、実行する(**モデル形成と検証**)
- 体罰なき子育て文化(**コミュニティ**)

### ストップ虐待・親支援のあり方検討会議 ＜虐待支援研究班 公式ホームページ＞



### 公式ホームページ

- これまでの「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」のライブ記録PDF版、「支援のヒント集」PDF版を掲載
- また、自由に使える画像集なども満載。
- URLは以下の通りです。
- <https://jutenkashienhp.wixsite.com/mysite>



## 子ども虐待の状況と支援のあり方 ～子ども虐待と地域の関わり～



関西大学 山縣文治



## 共通点は何？

大塚 璃愛来 さん

栗原 心愛 さん

船戸 結愛 さん

## 虐待を受けた子どもは、親のことをどのように感じているのか

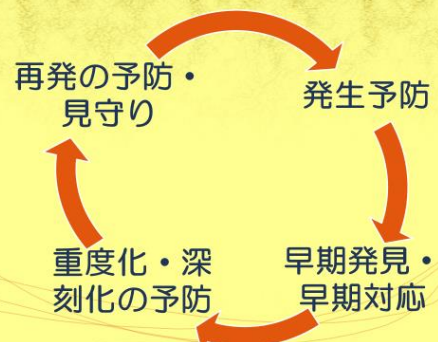
- 親との関係を取りたくない子
- 必ずしも親を嫌っているわけではない子
- 親の虐待の責任が自分にあると感じている子
- 家庭養護の場合、養育者に気を遣う子
- 親を許す子

親子関係の基盤は、その関係が、安全、安心、安定したものであるということ、親は、そのために努力をする必要があるということです。

虐待を受けて育った子どもたちは、この3つの「安」らさが薄かったり、消えてしまったりした状況にあります。

子育て支援は、長期的視点での「あんさんの郷」づくりです。虐待支援は「あんさんできない郷」からの回復、あるいは新たな「あんさんの郷」の提供です。

## 子ども虐待：4つの予防



## 子ども虐待の発生要因

子どもの要因	
親（家庭）の要因	
親子関係の要因	
社会の要因	

（子どもに責任があるという意味ではなく、虐待を受けやすい子どもという意味）

- ・ 親の期待に沿わない行動
- ・ 自己主張が強い
- ・ 成長が遅い
- ・ 障害
- ・ 実子でない

等

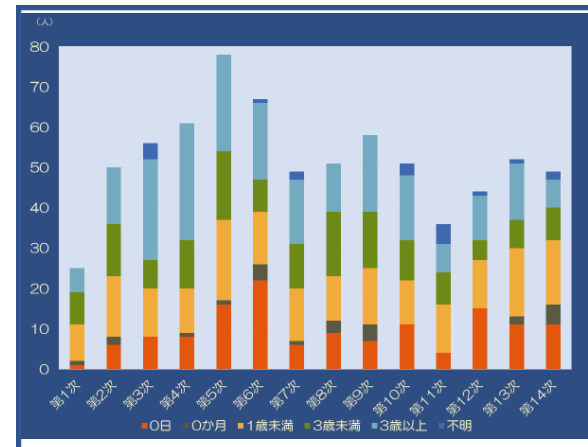
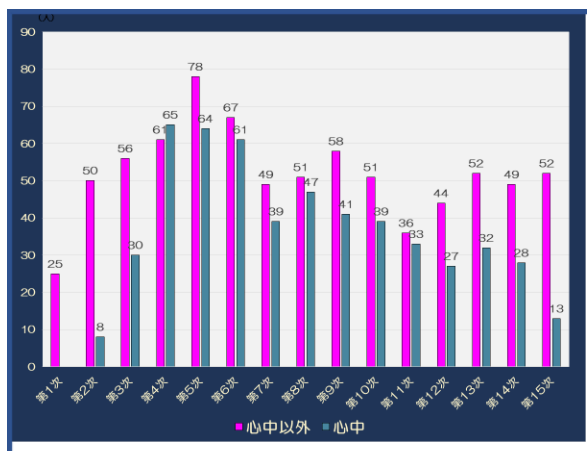
（子育てに前向きになれない状況）

- ・養育能力・意識の不足
- ・子どもより自分の楽しみを優先した生き方
- ・予期しない妊娠・出産
- ・歓迎されていない結婚・出産 等

（本人たちの受け止め）

- ・個人の生き方を尊重する社会
- ・（ネット）情報が正しい社会
- ・豊かさを「物」ものに求める社会
- ・無関心社会
- ・監視社会 等

- ・精神・人格面の問題
- ・自信過剰
- ・ゆがんだ責任感
- ・DV・家庭内孤立
- ・低所得
- ・有子再婚家庭（ステップ・ファミリー）
- ・社会的孤立 等



## 虐待死亡検証に関わって 思う5つのこと

- ・想定外の出来事は親子の側ではなく、支援者の側に起こっている
- ・公的児童相談体制の充実が0日児死亡を減らすことができるか
- ・児童相談所の設置は中核市まで必要なのか
- ・児童福祉司の国家資格化は必要なのか
- ・警察との信頼関係はどうすれば構築できるのか

## 子ども虐待の支援で 意識しておくべきこと

- ・経済的要因はさまざまな問題に影響する
- ・社会的孤立はさまざまな問題に影響する
- ・DV家庭では、子ども虐待も起こりやすい
- ・乳幼児期のネグレクトは死につながる
- ・大人は自分の非を認めるのが苦手である
- ・虐待はさまざまに組み合わせる
- ・暴力的であろうが愛着的であろうが、完全に支配されていると、本当のことをいいにくい
- ・他の対応方法がわからず、無自覚的に虐待をしている人も少なくない
- ・人間には回復力がある
- ・人は皆楽しく生きたいと思っているが、楽しさは人によって違う



## 親の子育て力を信じること

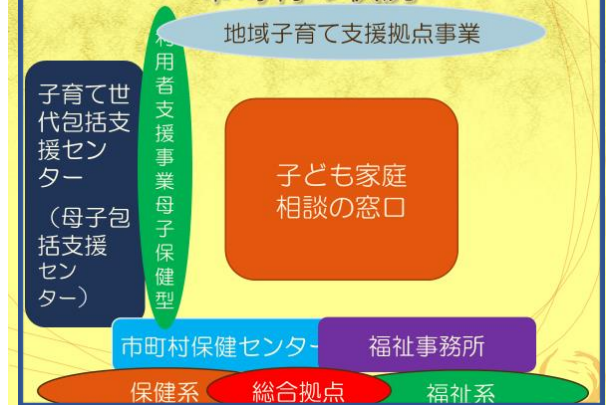
- **レジリエンス**：困難を乗り越える  
内的力、外的資源の配備と活用力
- **ストレングス**：本人や帰属集団の  
内的、外的強みを生かす関わり方
- **エンパワメント**：本人や帰属集団  
の意思や行動において、主体となる  
力を身につけること。

- ・「子育て力が低い」ではなく、  
「発揮できていない」という視点
- ・阻害要因を、個人の内部中心では  
なく、環境との関係に求める
- ・働きかけは、個人だけでなく、環  
境との関係の構築に求める
- ・その際、個人や家族のマイナス面  
ではなく、プラス面に着目する

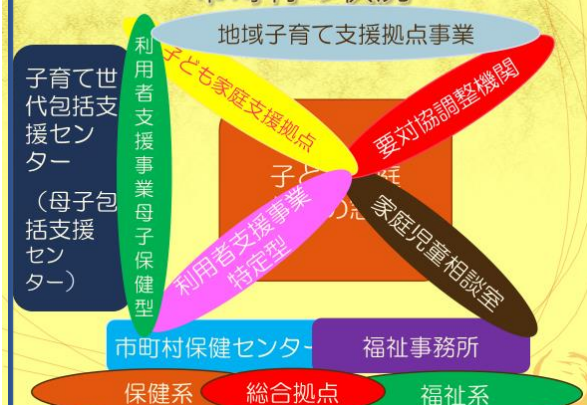
## 環境の力を借りること

- 本人にとって、支援者は大きな環  
境です。
- 本人が環境の力を借りて生きてい  
くことは、先ほどお話しした通り  
ですが、支援者も環境の力を借り  
て支援します。

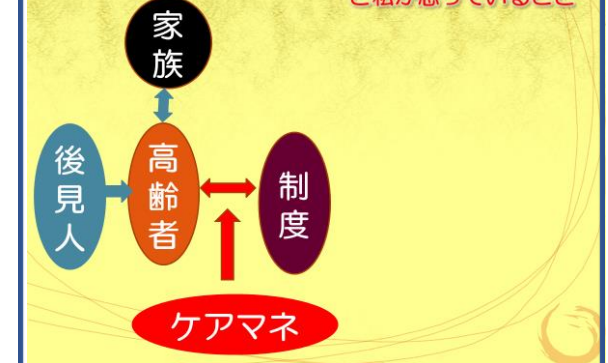
## 市町村の状況



## 市町村の状況



## 子ども家庭福祉ソーシャルワークの特徴 と私が思っていること





## 子ども家庭福祉ソーシャルワークの特徴

- ①家族と高齢者の意向がずれた場合、高齢者を支える制度構造。
- ②それが困難であったり、不安であったりした場合、成年後見人をたて、その意向を尊重する。
- ③実際の利用者＝契約者＝高齢者

ケアマネ

SWer

## 子ども家庭福祉ソーシャルワークの特徴



- ①子ども親権者の意向がずれた場合でも、子どもの意向は優先されない制度（能動的権利保障が弱い）。
- ②調整しても困難な場合、親権者を法的に消さなければ、未成年後見人をたてることができない（親重視）。
- ③契約者＝親（善意の親）  
実際の利用者＝子ども。
- ④利用者あるいは本人がわかりにくい構造（家族重視＝親子一体化）。

支援者は多様な価値と葛藤しながら  
実務に取り組む



支援者 ながら

専門職教育

所属機関



支援者は多様な価値と葛藤しながら

- ・親の今を認め、過去を否定しない
- ・親と子の生きる力、育てる力を信じる
- ・「育てる支援」より「寄り添う支援」を大切にする
- ・それを通じて、親も子も、あなた自身も育っていく（育て、育ち合う支援）

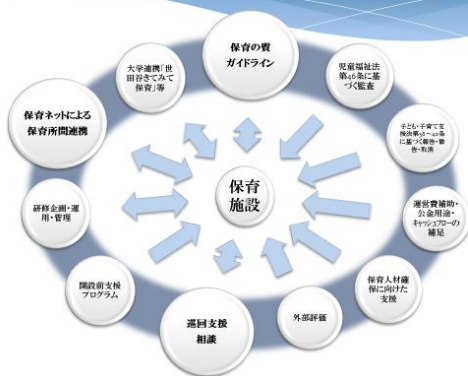
## 保育所保育の質の向上のための体系的な支援

世田谷区保育担当部保育課

## 世田谷区のあらまし

- \* 面積：58.05km<sup>2</sup>  
※東京23区中第2位
- \* 人口：912,095人（平成31年4月1日現在）  
※東京23区中第1位（山梨県や佐賀県と同規模）
- \* 世帯数：483,199世帯（平成31年4月1日現在）  
※東京23区中第1位
- \* よく耳にする世田谷の町：三軒茶屋・下北沢・二子玉川・成城など
- \* 基本計画（平成26年度から10年間）めざすまちづくり像  
：「子どもが輝く 参加と協働のまち せたがや」
- \* 子ども計画（第2期）がめざすべき姿  
：「子どもがいきいきわくわく育つまち」
- \* 子ども・子育て応援都市宣言：平成27年3月3日宣言

## 保育の質の向上に向けた行政支援



各保育施設と行政との連携による保育の質の向上

## 巡回支援相談

## 保育の質の向上のための支援

各保育施設が疑問・相談などを気軽にできるようにする。

### → 巡回支援相談の実施

- ・訪問までに質問をまとめてあり、訪問した職員と一緒に考える。
- ・訪問が待てない時は、電話で相談
- ・巡回訪問を職員指導に活用し、「巡回訪問で助言があった・・・」伝えやすくなる。

\*巡回指導相談を通して、行政と施設が共に保育に取り組む意識が生じる。

今後の課題

\*行政指導・監査の指導的な立場と巡回支援相談の支援的な立場

があるが、役割を明確に仕切れない難しさ

\*施設数の増加に伴う、巡回相談員の人員配置

## 巡回支援相談の仕組み

- \* 1施設 年1～5回
- \* 保育士と看護師のペアによる不定期訪問（栄養士も必要に応じて訪問する。）
- \* 巡回支援の視点  
子どもの発達援助/健康管理/保育環境/食育/  
保育内容/安全・衛生管理/保護者支援など
- \* 事業所と一緒に考える・・・助言相談としての立場
- \* 事業所の自主性への働きかけ
- \* 区民への情報提供(訪問回数と研修受講状況)

## 巡回支援相談の視点

- \* 保育所保育指針を基本とし、「子どもを中心とした保育」が行われているか。
- \* 保育士が子どもの目を見て温かく応答しているか
- \* 子どもが主体的に遊べる環境にあるか
- \* 安全面の配慮はどうか
- \* 食事の提供や食べさせ方、アレルギー児への配慮
- \* 保護者からの意見など(対応について)
- \* 園内研修の取り組み

など等

保育施設間の交流による質の向上

## 地域保育ネット

## 地域保育ネットとは

\*公立・私立・認証・保育室・保育ママなど施設・運営のあり方を問わず、保育施設同士が顔見知りになり支え合うネットワーク

目的・・・保育や子どもの育ちについて共有し、世田谷区全体の「保育の質の向上」を目指していく

参加者・・・各保育施設の園長・副園長・主任を中心に児童養護施設の方、民生委員等子どもに関わる人の集まり  
(学習会は、地域の保育士も参加している)

運営・・・各地域で公立・私立・保育ママ・認証から「保育ネット」担当者を選出し自主的運営。  
(保育課は、学習会費用・会場確保・講師紹介等バックアップ)

## 保育ネット発足の経緯

- 平成15年度に世田谷区が烏山地域をモデルとして第三者評価の内容検討会を開催
- 公立・私立・認証保育所・保育室等が参加
- 検討会終了後「せっかく知り合いになったのに、このまま解散するのは残念！」という声をきっかけに、新たな会がスタート
- 発起人7人を中心に「保育ネット烏山」が発足
- 烏山地域の保育ネットの活動いいよね・・・と他の地域からの声があがる
- 全地域で取り組めないか、公立保育園と保育課で検討
- 子ども計画に位置づけられる
- 平成21年に公立保育園が先頭にたって全5地域で発足
- 地域ごとに特色ある取り組みとなっている

## 保育ネットの取り組み・成果・課題

具体的な活動・・・保育ネット会議

定例会 年3回

- \* 学識経験者からの講義などの勉強会
- \* 小さいグループに分かれて、共通の議題について情報交換
- \* どうやって交流しようか、活動報告など話し合い

ネット活動の成果

- \* 同じ地域で働く者同士が顔見知りになる
- \* 情報交換や物品の貸し借り等助け合うという思いが定着
- \* 地域の全ての子どもたちの成長を支援
- \* 地域の子育て家庭を支援

今後の課題

- \* より多くの保育施設が参加できるようにする仕組みづくり
- \* 幼稚園とのつながり
- \* 地域の実情に合わせた学習会の充実

## 地域の保育園と一緒に(防災訓練や遊びの交流)



保育施設・事業者・地域・行政が  
共に保育の質の向上に取り組む

## 世田谷区保育の質ガイドライン



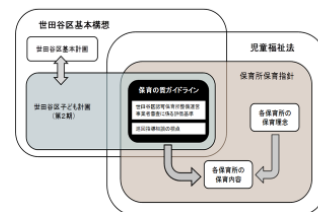
## 世田谷区のこれまでの取り組み

- \* 平成17年度 世田谷区保育安全マニュアル
- \* 平成18年度 区立保育園の民営化
- \* 平成20年度 保育の質の向上のための勉強会
- \* 平成21年度 保育の質の向上委員会  
(保育所保育指針の改定)
- \* 世田谷区の保育理念と保育方針の明示
- \* 保育施設整備における事業者審査

## ガイドラインの作成の趣旨

- \* 保育事業の多様化
- \* 実施主体の多元化(社福・学校法人・株式会社・・・)
- \* 保育所保育指針に基づく「子どもを中心とした」保育を世田谷区の子どもたちに提供する保育行政を明示
- \* 保護者や地域に保育を理解してもらい、保育に協力してもらうための保育の解説書
- \* 事業者が保育施設の保育を理解し、質の向上に取り組むための指針
- \* 「子どもを中心とした保育」を実践するため、全ての保育に関わる人が共通理解し、保育の質の向上を目指す指針

## ガイドラインの位置づけ





## ガイドラインの全体像

- \* 「子どもの権利」「職員に求められる資質」など7項目
- \* 「子どもの権利」を第一の項目にする意味  
児童の人権擁護をより具体的に実現するため
- \* 「職員に求められる資質」  
保育を構成する「人材」が一番重要
- \* 「運営体制」  
保育士等が安心して笑顔で保育に従事すること

## ガイドラインの活用

### 各施設の具体的な活用内容

- \* 人権についての確認や肯定的に子どもの姿を捉える事・環境作りの視点とする。(取り組みは「保育実践フォーラム」で発表する)
- \* 指導計画の反省に活用し、各自やクラスの取り組みを確認する。
- \* 職員の育成に活用する。
- \* 保護者会で活用し、保護者に保育を伝える。等々

### 巡回支援相談時に活用の確認

- \* 巡回相談時に各施設の活用を確認し「子どもを中心とした保育」の実践を目指す。

## 開設前からの支援

## 開設前研修とフォローアップ研修

- \* 学識経験者を含めた選定(審査)委員会での課題の洗い出し
- \* 世田谷区保育の質ガイドラインを利用し、「子どものための保育」について研修
- \* 実際の保育施設を見学
- \* 開設後にフォローアップ研修を実施し、開設後も丁寧に助言・指導を実施

## 主な研修内容(開設前研修)

- \* 児童福祉施設としての保育施設の役割
- \* 世田谷区での入園選考の考え方
- \* 世田谷区の特徴
- \* 苦情の特徴
- \* 保育施設の主な連携先について
- \* 世田谷区の保育の質の向上への取り組み

## 主な研修内容(フォローアップ研修)

### \* 今後の保育所運営と保育実践

Session 1 今後の保育所運営と保育実践

### \* 2年目以降におけるマネジメントの課題と展望

Session 2 開設園における保育実践の振り返り

Session 3 保育理念と組織マネジメント

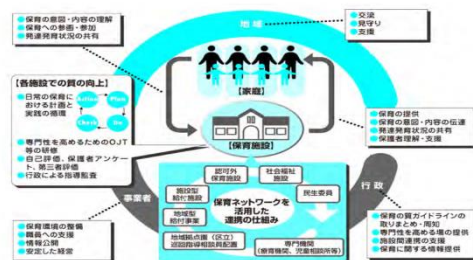
### 今後の課題

- \* 研修内容の充実にむけて、体系の検討
- \* 会場・時間の確保等調整の難しさ

## 研修の様子



## 保育の質を支える仕組み



## 參考資料

# 世田谷区全図

**世田谷区全域**

**周辺行政区分**

- 品川区
- ▲ 目黒区
- △ 国領町
- 三軒茶屋
- ◇ 東大塚駅周辺

**地域別行政区分**

- 中井地区
- 西新宿地区
- 代官山地区
- 仙川地区

**区役所**

**世田谷総合支所**

**玉川総合支所**

[illegible]

世田谷区の就学前人口と  
待機児童数の推移

### 世田谷区の年齢別就学前児童数の推移

年齢	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年
5歳	6,062	6,060	6,095	6,268	6,578	6,731	6,887	7,231	7,102	7,107
4歳	6,022	6,023	6,221	6,614	6,754	6,877	7,170	7,059	7,096	7,462
3歳	5,974	6,261	6,657	6,743	8,831	7,137	7,023	7,153	7,418	7,509
2歳	6,271	6,668	6,777	6,869	7,169	7,078	7,222	7,411	7,543	7,582
1歳	6,617	6,825	6,882	7,192	7,115	7,245	7,486	7,624	7,708	7,569
0歳	6,642	6,624	6,996	6,972	7,060	7,377	7,577	7,605	7,447	7,075

### 就学前児童の養育状況の推移

平成	保育園	幼稚園	家庭・その他
平成20年	24.1%	31.8%	44.1%
平成21年	24.0%	30.6%	45.4%
平成22年	24.5%	30.4%	44.7%
平成23年	26.5%	29.6%	43.9%
平成24年	26.0%	29.4%	42.6%
平成25年	24.8%	24.8%	41.2%
平成26年	20.1%	28.4%	41.1%
平成27年	21.4%	27.4%	41.5%
平成28年	24.0%	28.6%	38.2%
平成29年	18.8%	24.8%	36.9%

8年間で約1.3%（約5,700人）の状況の急化  
⇒今後、保育施設の利用率は、就学前児童数の4割を  
超えることを想定しています。

在宅子育て世帯の割合の減少  
1.0～2.0歳児の保育需要の増大

### 認可保育園入園申込者数と待機児童数の推移

年度	認可保育園入園申込者数	待機児童数
平成20年	2,860	335
平成21年	3,376	613
平成22年	3,854	725
平成23年	4,407	688
平成24年	4,429	786
平成25年	4,986	884
平成26年	5,363	1,109
平成27年	6,175	1,182
平成28年	6,439	1,198
平成29年	6,680	861
平成30年	6,245	486

## これまでの保育施設整備数

### 保育施設数の推移

年度	区立認可保育園	私立認可保育園	区立認定こども園	私立認定こども園	地域型保育園事業	区外保育施設
平成27年度末	54	64	41	56	50	65
平成28年度末	66	59	65	66	80	99
平成29年度末	126	147				

- 区立認可保育園
- 私立認可保育園
- 区立認定こども園
- 私立認定こども園
- 地域型保育園事業
- 区外保育施設

### 保育定員数の推移

年度	区立認可保育園	私立認可保育園	区立認定こども園	私立認定こども園	地域型保育園事業	区外保育施設
平成27年度末	2728	2677	4215	4575	5123	5264
平成28年度末	6493	7894				
平成29年度末	9850	11150				

- 区立認可保育園
- 私立認可保育園
- 区立認定こども園
- 私立認定こども園
- 地域型保育園事業
- 区外保育施設



## 保育の質ガイドライン ～子どもの権利～

- 世田谷区では、保育の質の向上に取り組む上で、子どもの権利を守ることを一番大切にし、保育内容全てに関連することと考えています。

「子どもが何を求めているか」を知ろうとする。  
子どもの権利について職員全体で確認し、充分配慮している。  
職員は、一人ひとりの子どもの行動や欲求に、わかりやすい言葉で穏やかに個々の子どもに語りかけ、応答的に関わっている。  
一人ひとりの子どもの生活習慣や文化の違いを知り、それを認めあう心を育てるよう努めている。

## 保育の質ガイドライン ～職員に求められる資質～

- 保育施設の職員は、子どもを受容する温かい心を持って子どもに全力で愛情を注ぐことのできる人間性と専門性の向上に努め、一人ひとりの子どもを心から尊重でき、子どもや保護者から信頼され尊敬される職員であって欲しいと考えています

子どもと関わることを喜び、子どもと一緒に楽しむことができ、積極的に保育に従事している。  
乳幼児の発達過程を理解し、子ども一人ひとりの成長・発達に合わせ見通しを持った援助ができる。  
保護者の気持ちに寄り添い、保護者と共に子どもの成長を喜び、子どもの発達を支援している。

## 保育の質ガイドライン ～保育環境～

- 子どもの命が守られることを第一に、乳幼児期の子どもの発達をとりえ、子どもが遊んでみたいような環境を構成し、子どもが十分楽しみ、満足感や充実感を得ることができるよう環境を構成していきます

子どもの成長・発達に合わせた玩具、遊具、絵本が、子どもの手の届くところに適切な量で用意され、子どもが自由に遊び、主体的に遊びを展開できるように配慮されている。  
子どもたちが遊びこむことができる時間と空間への配慮、自由な遊びコーナー等、子どもの自主性、自発性を尊重するとともに、子ども同士のかかわり遊びが豊かに行われるように工夫されている。

## 保育の質ガイドライン ～保育内容(生活と遊びの中の教育～

- 保育施設のなかで、子どもたちは生活と遊びを通して、様々な経験・体験を重ね、現在を心地よく生き生きと幸せであり、未来に向かって生きる力の基礎を培います。

子どもの好奇心、探究心、思考力などが育つよう、子どもが自ら興味を持って遊ぶことのできる保育を行っている。  
子ども一人ひとりの置かれている状況を把握し、ありのままの姿を理解と見通しを持って受け入れ、子どもが安定感と信頼感を持って、自分らしさを発揮し、行動できるよう援助している。

## 保育の質ガイドライン ～保護者支援・地域の子育て支援～

- 子どものために保護者や地域の子育てを支援することを基本とし、保育施設と保護者や地域が話し合い、お互いの気持ちを認め合い、共に協力して、地域全体で子どもを育てる環境づくりに努めることを大切にしています。

保護者懇談会や行事などで保護者同士の話し合いの場や協同で取り組む活動を提供したり、保護者の自主的な活動に協力するなど、保護者間の連携を支援している。  
保育施設の活動や行事に地域住民等に参加してもらうなど、子どもが職員以外の人と交流できる機会を確保している。  
子どもの成長の連続性を保障するため、子ども同士の交流や職員間の情報交換など、小学校との連携を図っている。

## 保育の質ガイドライン ～運営体制～

- 保育技術や知識を深める機会が豊富に確保されていることは、世田谷区の保育の質の向上につながります。

施設を運営していくにあたっての現場での意見が、経営者層の判断材料となる組織である。  
職員が安定して働き続けることができる労働条件(給与水準・休暇制度・休憩時間等)が整備されている。  
職員の自己啓発やリフレッシュのための労働環境(人員配置・時間の保障等)が整えられている。  
通常業務内において研修やOJTなどの機会や保育ネットに参加し情報交換することができるよう、計画的に時間を確保し、職員体制を整えている。

## 謝辞

講演者の山縣文治先生（関西大学教授）からは虐待問題の専門的知識や最新の情報をわかりやすく教えていただきました。後藤英一氏（保育課長）からは、世田谷区の保育行政の取り組みについてお話いただきました。講演のライブ記録の公表に関しても快くお認めくださいました。厚く御礼を申し上げます。

第3回東京開催における運営に当たっては、日本多機関連携臨床学会の会員である三代果乃子さん、足立実咲さん、小峰みのりさん、上田綾香さん、飯村愛さんをはじめ多くの方々にご協力をいただきました。

ご参集いただいた保育園や保育行政に関わる皆様方、日本女子大学家政学部児童学科の学生の皆さんにも活動を盛り上げていただきました。ありがとうございました。

2020年1月25日 第3回東京開催  
「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」LIVE 記録

発行日 2020年2月28日

発行元 日本女子大学重点化資金 虐待支援研究班

発行者 吉澤一弥、村上千幸、西智子、松原乃理子

協働制作 日本子ども子育て支援センター連絡協議会

日本女子大学 虐待支援研究班 事務局

〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1

日本女子大学家政学部児童学科 西研究室

連絡先 [jutenka.shien@gmail.com](mailto:jutenka.shien@gmail.com)

ホームページ <https://jutenkashienhp.wixsite.com/mysite>

日本子ども子育て支援センター連絡協議会（ここネット）事務局

〒861-0123 熊本県熊本市北区植木町有泉829

社会福祉法人喜育園 山東こども園

連絡先 [info@kokonet.jp](mailto:info@kokonet.jp)

ホームページ <https://www.kokonet.org/>

